

県営林道澄水山線開設事業に伴う

御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ

1984年5月

島根県 鹿島町教育委員会

県営林道澄水山線開設事業に伴う

み つ かい づか
御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ

1984年5月

鹿島町教育委員会

序

ご存知のように当鹿島町には史跡佐太講武貝塚をはじめ、古浦砂丘遺跡、銅劍・銅鐸を出土した志谷奥遺跡、大規模な古墳群であることが判明した奥才古墳群など縄文時代から古墳時代以降にかけて著名な遺跡が数多く知られています。

このたびは県営林道澄水山線の開設にあたり、御津地区で横穴群が発見され、発掘調査を実施いたしました。横穴墓の調査は町内では2例目ですが、御津地区での発掘調査は今回が初めてのことであり、当町の古代の人々の生活を考える上で貴重な資料を提供したものと申せましょう。この資料が文化財に対する理解を一層進める上で広く活用されることを願うものであります。

終わりになりましたが、調査にあたってご指導・ご協力を賜わりました島根県教育委員会、松江農林事務所森林土木課をはじめとした関係各位に心から謝意を表し、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和59年5月

鹿島町教育委員会

教育長 加納益雄

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が松江農林事務所の委託を受けて実施した県営林道澄水山線開設事業に伴う御津貝塚横穴群発掘調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字御津2,440番地に所在する。
3. 調査は、昭和59年4月16日から5月12日まで延べ20日間を費して実施した。調査体制は以下の通りである。

事務局 井上 穣（鹿島町教育委員会教育次長）

曾田 稔（　　同　　社会教育主事）

調査員 赤沢秀則（　　同　　嘱託）

調査補助員 伊藤克己・串崎博宣・島津良幸（以上島根大学学生）

4. 調査にあたっては、松江農林事務所森林土木課、豊洋建設株式会社の協力があり、島根県教育委員会文化課係長永塚太郎、同主事松本岩雄の両氏からは指導をいただいた。また、横穴周辺の岩層名については、松江北高等学校教諭三島欣二先生から教示を、周辺の遺跡の調査については島根大学学生角田徳幸氏から協力をいただいた。以上記して謝意を表したい。
5. 本書に用いた方位は全て調査時の磁北である。真北から $6^{\circ} 42'$ 東を示している。
6. 本書の編集・執筆は、曾田・赤沢が担当したが、第IV章は、鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝助教授に玉稿をいただいた。厚くお礼申し上げたい。
7. 出土品は、鹿島町教育委員会で保管している。

目 次

序	
I 調査の経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
1. 1号穴	6
2. 2号穴	16
3. 3号穴	24
4. 4号穴	29
IV 貝塚横穴群出土の人骨について	37
V 周辺の遺跡	43
秋葉山古墳群	43
茶畠横穴群	45
恵谷横穴群	46
VI 小結	48

挿図目次

図1 鹿島町位置図	1	図17 3号穴実測図	25・26
図2 御津貝塚横穴群と周辺の遺跡	3	図18 3号穴土層図	27
図3 御津貝塚横穴群位置図	5	図19 3号穴出土遺物実測図	28
図4 貝塚横穴群第Ⅰ支群配置図	5	図20 4号穴土層図	30
図5 1号穴実測図	7・8	図21 4号穴実測図	31・32
図6 1号穴土層図(1)	9	図22 4号穴羨道部閉塞状況	33
図7 1号穴土層図(2)	10	図23 4号穴出土遺物実測図	35
図8 1号穴羨道部閉塞状況	11	図24 積石正面図	36
図9 1号穴前庭平面図	12	図25 1号穴内人骨出土状況	37
図10 1号穴出土遺物実測図	14	図26 秋葉山2号墳箱式石棺実測図	43
図11 2号穴実測図	17・18	図27 秋葉山3号墳箱式石棺略測図	44
図12 2号穴土層図	19	図28 秋葉山3号墳出土臼玉実測図	44
図13 2号穴羨道部閉塞状況	20	図29 茶畑横穴群3号穴実測図	45
図14 2号穴玄室内石材散乱状況	21	図30 恵谷横穴群2号穴実測図	46
図15 2号穴玄室内箱式棺復元模式図	22	図31 恵谷横穴群3号穴実測図	47
図16 2号穴出土遺物実測図	23		

図版目次

図版1 御津貝塚横穴群遠景・近景	図版9 3号穴正面・羨門部土層
図版2 1号穴正面・開口時の玄室の状況	図版10 3号穴玄室内・羨道・出土遺物
図版3 1号穴玄室内・1号穴内人骨出土状況	図版11 4号穴正面・閉塞石
図版4 1号穴前庭横断面・羨道閉塞石傍観 前庭部遺物出土状況	図版12 4号穴羨門部土層・石材
図版5 1号穴出土遺物	図版13 4号穴玄室内・出土遺物
図版6 2号穴正面・閉塞状況	図版14 第Ⅱ支群全景
図版7 2号穴玄室内石材散乱状況・2号穴 側壁・石棺材	図版15 1号穴出土上人骨(1)
図版8 2号穴内土器出土状況(1)・(2)2号穴 出土遺物	図版16 1・2号穴出土人骨
	図版17 秋葉山2・3号墳箱式石棺 3号墳出土臼玉

I. 調査の経過

御津貝塚横穴群は、昭和59年3月2日、県営林道澄水山線の工事に伴い、2穴が開口発見された。工事関係者から連絡を受けた工事発注者である松江農林事務所森林土木課は鹿島町農林課を通じて町教育委員会へ連絡した。町教委は同日現地を訪れ、遺跡であることを確認し、協議が整うまで現場は現状のまま保存することを関係者と約した。

しかし、この際の連絡不徹底により、翌3月3日松江警察署が、不審人骨が出土したとの誤報により現地を訪れ、人骨、遺物を取り上げてしまった。後に松江警察署から出土状態の略測図および写真の提供を受けたが、出土状態に一部不明な点を残すことになった。

町教委と農林事務所は、発見の事情からして緊急に発掘調査の手続きをとることとし、農林事務所からは3月2日付遺跡発見通知書の提出を得、町教委は3月6日付発掘調査通知書を提出した。次いで4月5日付をもって町教委と農林事務所は委託契約を締結し、4月6日より発掘調査を開始した。調査中新たに発見した2穴も加え、計4穴の調査は5月12日に終了した。

しかし、町教委は周辺の状況から、さらに横穴が存在する可能性があるため、工事の再開にあたっては立会の必要がある旨、農林事務所に連絡し、5月30日に立会を行なった。ところが、このうち工事は続行され、調査地点の東方で林道法面に横穴前庭、羨道が断面となって露呈することになった。ここでは5穴あることが確認でき、対応に苦慮したが、横穴の発見された斜面は完成斜面となっている上、断面にあらわれた横穴も土砂が充満しており、とりあえずは遺物等が流出することはないと判断されたので、現状のまま保存することとした。

この合意に基き、農林事務所から7月30日付遺跡発見通知書の提出を得て、糸余曲折を経た調査は正式に終了した。

なお、調査を行なった4穴を貝塚横穴群第I支群、新たな5穴を第II支群として本書では扱うこととした。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

御津貝塚横穴群は、島根県八束郡鹿島町大字御津字貝塚2,440番地に所在する。この周辺では島根半島東半の山塊が、急峻な海蝕崖をなして日本海に臨んでいるが、この海岸沿いの集落は、わずかな緩傾斜地を選んで立地しており、御津の集落もこういったもの一つである。本横穴群は、集落をとりまく丘陵の西斜面、標高約30m前後の地点に位置している。この地点の北に大きく西に張り出す尾根があるため、遺跡からは日本海はおろか、集落の北半をのぞむことはできない。

この御津の小平地をめぐって、秋葉山古墳群（後述）、的松古墳群、茶畑横穴群（後述）などの古墳・横穴群の存在が知られているが、古墳時代を溯る遺跡の存在は今までのところでは知られていない。また、当時の人々の生活の拠点となった集落についても全く不明である。現在の集落と立地を共にしているためと考えられる。

8世紀代に著された『出雲國風土記』によると御津は「御津浜」と見え、島根郡加賀郷に属しており、「百姓の家あり」と記される他、御津社などの記述が見えている。10世紀の『倭名類聚抄』ではやはり島根郡加賀郷に含まれ、平安時代には延暦寺領があった。

中・近世に至ると、御津経塚、御津宝篋印塔といった遺跡が知られる他、文書の記録によれば漁業だけでなく、船便を利用した交易の舞台ともなっている。近世には水浦村と称し、松江藩領の一つとなっている。集落は、わずかな平地に家屋が密集するため、1747（延享4）年、1782（天明2）年、1784（天明4）年、1847（弘化4）年、1851（嘉永4）年には火災のため、多くの家屋が焼失したほか、1778（安永7）年には豪雨によって家屋のほとんどが流失するなど、度々にわたって災害を被っている。

近代には御津浦という村名であったが、1889（明治22）年からは御津村と変え、1896（明治29）年にはそれまで属していた島根郡から八束郡に移っている。戦後、1956（昭和31）年に合併し、鹿島町の一大字となり現在に至っている。

周辺の横穴墓について鹿島町全域を見ると、群として全容の判明したものは少ないが、現在18群60穴が知られている。分布では最も耕地面積の広い講武平野をめぐる各地点に多くの横穴群が知られている。その他海岸部の小平地を見下ろす地点に点々と営まれているが、未だその様相は明らかでなく、本貝塚横穴群のように今までその存在を知られていなかったものが、今後も発見される可能性があり、横穴数はさらに増加すると考えられる。具体的には、総数20基以上からなる上講武の寺の奥横穴群、7基以上からなる名分の廬廻

^{注8}

横穴群などかなり大規模なものが知られている。こうして各地に横穴群が営まれる一方、石棺式石室を内部主体とする岩屋古墳、^{注9}横穴式石室であったと伝えられ、装飾付須恵器を有していた向山古墳などいわゆる首長墓も造られ、墳丘や石室に葬られる階層と、横穴墓に葬られる階層とに明らかな格差が生じていることを窺うことができる。

^{注10}

周辺に分布する横穴の形式は、丸天井形、整正家形平・妻入形、三角形断面形平・妻入形の5形式が知られ、かなりバラエティに富んではいるが、講武平野をめぐる横穴群では丸天井形が主流を占め、支群中にわずかに整正家形および三角形断面形の妻入りのものを含んでおり、平入形式のものはごくわずかである。こういった横穴の分布の中で、貝塚横穴群は4穴全てが三角形断面形平入形式であることは注目される。また、峠をはさんだ至近距離に位置する恵谷横穴群(後述)が整正家形横穴3穴からなり、そのうちに平入形式のものを含んでいることは、周辺の横穴群の分布の中では、きわだった1地区を形成しているといえよう。



図2 御津貝塚横穴群と周辺の遺跡 (1/50000)
 1. 貝塚横穴群 2. 茶畠横穴群
 3. 恵谷横穴群 4. 寺の奥横穴群 5. 清水奥横穴群 6. 才の奥横穴群 7. 芦谷横穴 8.
 風廻横穴群 9. 一矢横穴 10. 田中の奥横穴 11. かまの横穴 12. 芦山横穴群 13. 峯谷寺の
 奥横穴群 14. 峰谷寺の横穴群 15. 寺尾横穴群

III. 調査の概要

御津貝塚横穴群第Ⅰ支群は、澄水山塊の西端斜面に穿たれている。かなり傾斜の急な斜面の幅12mのうちに南から順に1～4号穴が相接して穿たれており、1つの支群として考えることができる。さらに南方には第Ⅱ支群5穴がほぼ南を向いて開口している。この第Ⅰ支群が位置する北西は、小規模な谷状の部分をなしているがこれをはさんで対するように御津茶畑横穴群が位置している。貝塚横穴群第Ⅰ支群と標高もほぼ等しく、位置する地点の字名の関係から別の横穴群として命名されているが、これも同一の横穴群の支群として考えるべきであろう。

横穴群の所在する崖面を観察すると、横穴は幅約5mの帯状の緑色凝灰岩(green tuff)の岩脈が走っており、この層を目ざして横穴は掘り込まれている。この層の上下はブロック状に割れる黒色頁岩(black shale)の層で、横穴などを掘り込める地質ではない。茶畑横穴群3号穴、貝塚横穴群第Ⅱ支群も、第Ⅰ支群と同様の緑色凝灰岩の層中に掘り込まれ、標高もほぼ等しいことから、第Ⅰ支群の掘り込まれている同一層の続きに営まれたものと考えられる。

第Ⅰ支群中では、2号穴が最も高い位置にあり、玄室床面での標高は33.15mで、最も低い4号穴との高低差は0.9mを測る。

第Ⅱ支群は、第Ⅰ支群の東に約10m離れた地点に位置している。標高は約35～36mと第Ⅰ支群よりはやや高い立地である。山腹を緑色凝灰岩の岩脈が東に向ってゆるやかにのぼっており、この岩脈をめざして掘り込まれる横穴も、この層に沿った形となっている。東に位置するものから順に1～5号穴と呼ぶことにすると、中央の3号穴が最も高い位置にあり、西端の5号穴が最も低くなっている。

横穴が露出する法面を観察すると、前部はいずれも削平されてしまっている。1・4号穴は法面に鞍道部が露出しており、4号穴では、この断面に閉塞用に積まれた河原石が認められる。2・3・5号穴は法面に玄室が断面で露出しているようである。この5穴は互いに相接して掘り込まれており、第Ⅰ支群と同様、支群としての強いまとまりを示しているものと考えられる。

この周辺は、貝塚横穴群第Ⅰ・Ⅱ支群、茶畑横穴群の数支群が群集していることになり、横穴は現在知られているものだけで13基、総数では数十基にのぼるものと考えられる。御津地区での横穴密集地帯というばかりでなく、これだけの密集度を示す横穴群は町域内でも数少なく、今後とも土木工事等においては細心の注意を要する地点である。

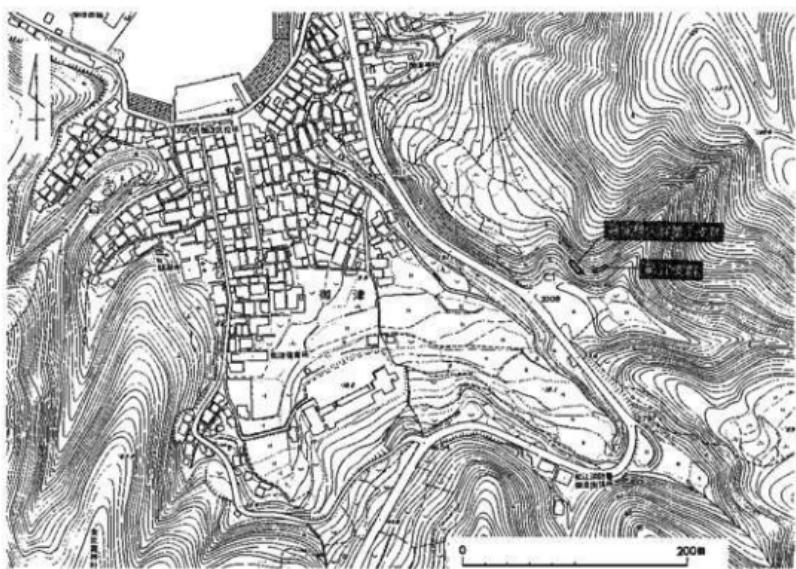


図3 御津貝塚横穴群位置図(1/5000)

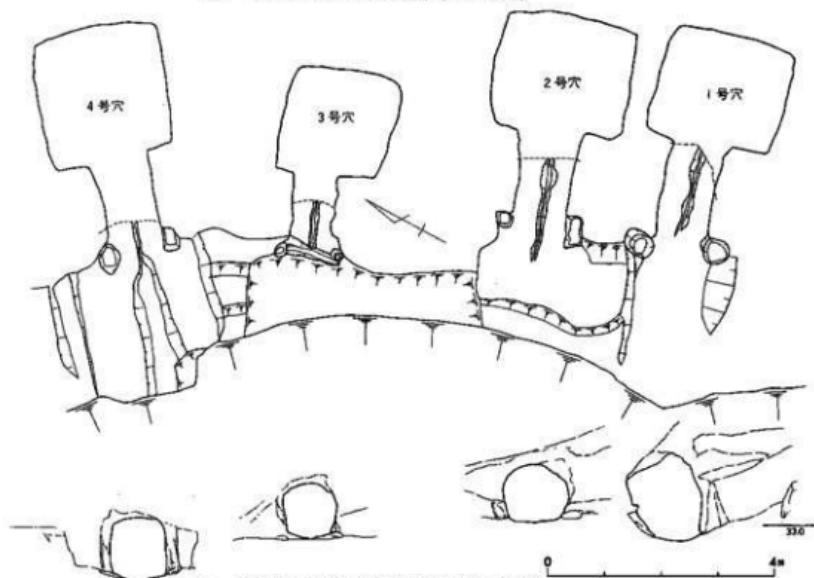


図4 貝塚横穴群第1支群配置図(1/100)

1. 1号穴

1号穴は、支群中最も南端に位置し、玄室床内での標高は3.29mである。重機によつて羨道と玄室の一部を破壊されているが、羨道部下半と、そこに積まれた閉塞石はほぼ現状のまま残存していた。

玄室床面はほぼ正方形を呈し、奥行2.1m、幅2.3mを測る。玄室主軸はS-78°-W^{往13}である。形式は、三角形断面形平入形式である。前壁と奥壁は床面からほぼ垂直に近く立ち上ったのちに屈曲して、丸味を帯びて棟の線に至っている。側壁はそれほど内傾せず切妻形式に近い状況を呈している。玄室高は1.4mである。床面には幅0.10m、深さ0.05mの排水溝が掘られている。排水溝は、奥壁中央部から羨門までの玄室・羨道を貫くものと、玄室四壁をめぐるものである。玄室四壁をめぐる排水溝は、玄門付近で玄室中央を貫くものに合流している。排水溝は他の3穴で検出されたものほど明瞭でない。四壁は風化しており、工具痕などは残存していない。

羨道は、底面で長さ1.7m、幅0.9mを測り、上半が破壊されているものの、横断面は上方でわずかに幅の狭まる台形状を呈するものと考えられる。羨門部で羨道は大きく広がり前庭部に続くが、この部分に深さ0.15mの円形の掘り込みがあり、板状の石材が立てられ、門状の施設を構成していた。前庭部は長さ2.5m、幅1.2mである。この前方は急な崖となるが、前庭部と崖との間はわずかな平坦面があり、横穴相互を結ぶ羨道の残存部と考えられる。

玄室内からは人骨、須恵器杯蓋2、高杯2、刀子残片が検出されている他、花崗岩の偏平な石材8個が検出されている。人骨の一部および須恵器蓋1、高杯2は松江警察署員によって持ち出されたが、その際の略測図により不正確ながらその位置を復元できた。

人骨は、玄室南西端にまとまるもの（A地点）、北西隅にまとまるもの（B地点）、玄室中央やや奥壁寄りにまとまるもの（C地点）と3地点にまとまって検出されている（第IV章参照）。人骨はいずれも不自然な配列状況を呈し、白骨化した段階で人為的に整理・移動された形跡が認められる。C地点の2体を葬るのに際して、A・B 2地点の人骨が玄室隅に移動されたものと考えられる。人骨の性別・年齢は、A地点のものが女性・熟年者、B地点のものが男性・壮年者、C地点のものが女性・熟年者、男性・青年者と推定されている。

遺物はその出土状態からは、どの人骨に伴って副葬されたものかは不明であるが、玄室南東寄りで検出されている。

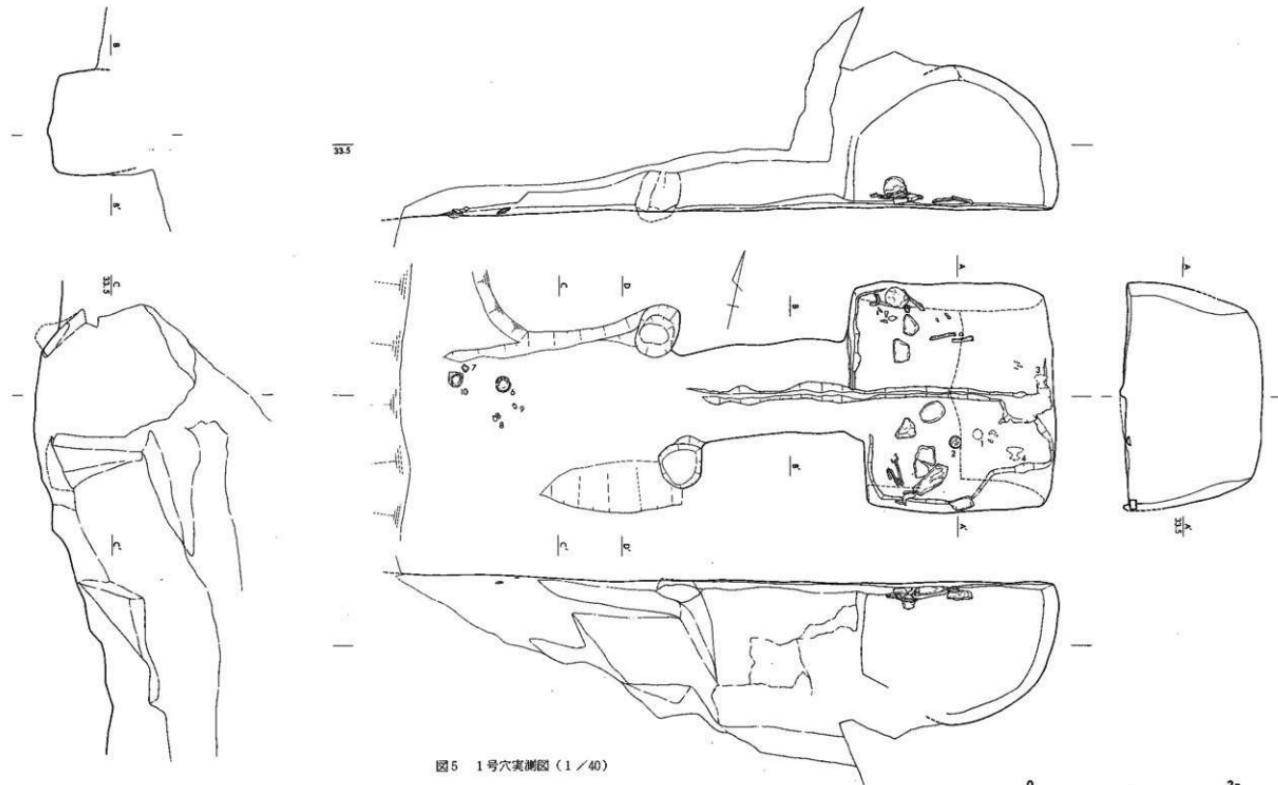
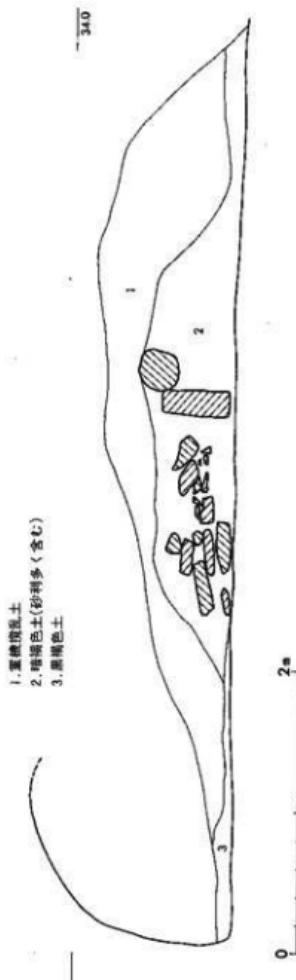


图5 1号穴实测图 (1/40)

0 2mm
- 7 ~ 8 -

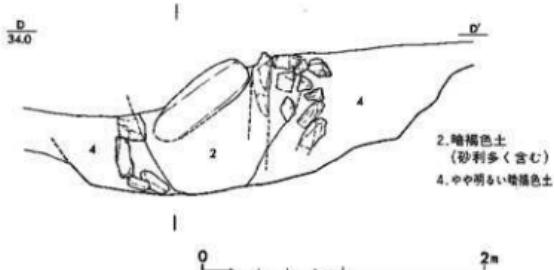


また、玄室床面には偏平な凝灰岩の石材が8個残存している。松江警察署員によって移動された玄室北東隅付近の2個も含めると計10個の石材があったことになる。配列からはその使用目的は明らかでないが、埋葬者を乗せた木板等の台石と考えられる。

前庭部、羨道部には重機によって掘削された土砂が厚く堆積している。この下層には角礫が多く含む暗褐色土が床面まで堆積している。玄室内には、この下層に黒褐色土が薄く認められた。羨道部での閉塞は暗褐色土層中に設けられている。縦断セクションは単純な層序をなしているが、羨門付近での横断セクションでは、暗褐色土層の両脇にやや明るい暗褐色土が認められ、暗褐色土層が後から掘り込まれたものであることがわかる。つまり、やや明るい暗褐色土で閉塞していた前庭部を追葬に際して掘削し、再び埋め戻す際にかぶせられたのが暗褐色土であったと考えられる。玄室内には4人の埋葬が想定されるが、暗褐色土層はその最終時の埋葬に際しての土層と考えられ、やや明るい暗褐色土層はそれ以前のいずれかの段階に伴うものと考えることができる。

玄室内に流入する土砂は他の3穴に較べて少なく、明らかに盜掘を受けている2~4号穴が、かなり長期間にわたって開口していたことを物語るように厚く土砂および角礫が堆積していると対照的である。

前庭部では、暗褐色土中に須恵器蓋、杯、高杯脚部、長頸壺底部、土師器小片が含まれている。床面からわずかに浮いての出土で、いずれかの追葬に伴うものか、横穴への埋葬が終了した後に供えられたものと考えられる。玄室内には4人の埋葬が想定できるので、その須恵器が埋葬の初期に伴うものとすれば、前庭部の土器と若干の時期



差があることは、それほど大きな矛盾ではないが埋葬終了後に供獻されたものである可能性も否定しきれない。

図7 1号穴上層図(2)

(1/40)

羨道は、石材を積んで閉塞している。羨道上部は重機によって破壊されてはいるものの閉塞施設そのものは、さほどの攪乱は受けていない。閉塞石は長さ1.4m、幅は羨道一杯の1.0mの範囲内に積まれ、凝灰石を主としている。石は長さ約30cm、幅約15cm、厚さ約10cm程度の偏平なもので、割石を主とするが、角は磨耗したものである。一部に石材は同じだが、角の全くとれた河原石も含んでいる。

閉塞石は、最下段にやや大形の石4~5個を4列に並べ、上方にゆくにつれて列数を減らしながら、5段程度に積んでいる。高さ約0.5mに積み上げられており、羨道の約半分の高さしかない。羨門付近には浮いた状態で石が検出されており、閉塞石上段のものが一部転落しており、この部分でわずかに石に乱れが認められる。

この閉塞石の前方、羨門部には床面に掘られた径0.45m、深さ0.15mの穴に板状の石材が立てられ、門状の施設をなしている。遺存状態のよい南側のものでは、長さ約100cm、幅5.5cm、厚さ2.0cmの板状の石材を立て、その外側にさらに長さ9.5cm、幅2.5cmの2本の柱状の石材が立てられていた。これらの石材の内側根元には2個の石材、外側には10個の石材がつめられ、板石を固定している。一方、北側でも同様の石材を立てていたものと考えられるが、割れやすい石材を使用したため、上半が割れて転落していた。こちらでも内側根元に控えの石がつめられている。しかし、外側は重機の攪乱を受けているため不明である。両側に立てられたこれら板材にかけわたすように円柱状の花崗岩が乗せられている。北側の板石が折れたためにわずかに傾いて転落しかけているが、当初は羨門部に門状の施設を構成していたものと考えられる。^{注15}

この部分での土層の観察から、門状の施設下部は、やや明るい暗褐色上層を攪乱せずに立っており、最終段階の追葬に際して堆積した暗褐色土層は、この門状施設の内側のみに認められ、少なくとも最終段階の追葬以前には設けられていたことがわかる。さらに羨門

部に施された削り込みが、これら板石に合わせて振り込まれていることから、1号穴掘削当初から設けられたものと考えるのが妥当であろう。門状の施設を羨門部に設けた上に、その内側の羨道部に石材を積み上げるという二重の閉塞を有しており、極めて特異な施設として注目される。同様な門状の施設は4号穴でも検出されているが、ここでは羨門両脇に立てた板石の外方にも、さらに2枚の板状の石を立てた上に、石材で根固めをしており非常に堅固かつ丁寧なつくりといえる。

この部分での閉塞で使用された石材は約90個である。その他、前庭部でも同様の石材が遺物とともに約10個検出されている。

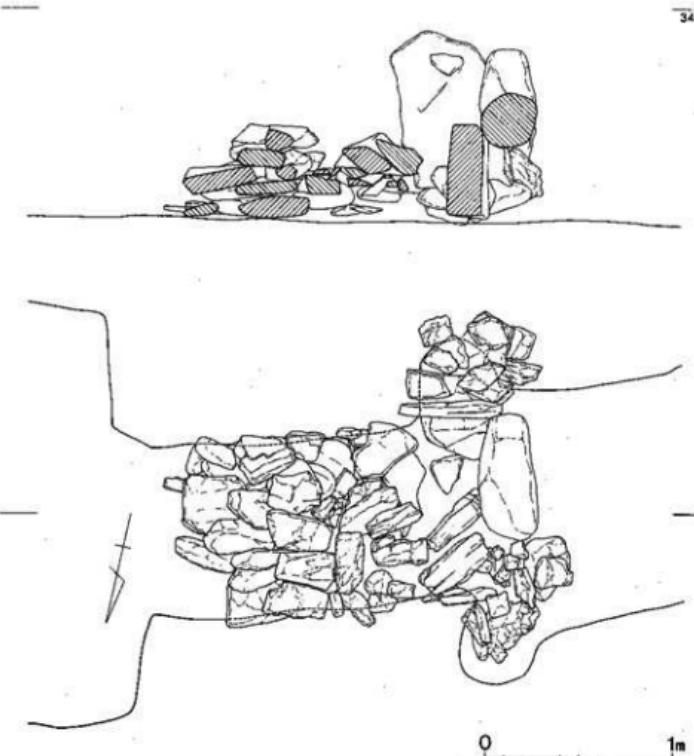


図8 1号穴羨道部閉塞状況（1／30）

1号穴周辺は重機によって大きく破壊されているが、前庭およびその周辺は幸い損壊を免かれていた。前庭南側には地山の張り出しが掘り残してあり、第Ⅰ支群の南半を限る施設と考えられる。この張り出しは、1号穴羨門から約1.5mにわたって突出している。上部は破壊されているため、高さは不明であるが、1号穴床面から約3m上方で墓壁と傾斜を一致させるものと考えられる。張り出し斜面には、数段の段をもち、複雑な外観を呈するが、段が当初からの意図的な施設として造られたものか、自然な崩壊によるものかは明らかにできなかった。しかし、この張り出し基底部は羨門付近で大きく直線的に開き、羨門床面の削込みの幅でのびる前庭の南側では、さらにもう一段の段をなしている。この基底部は直線的で、前庭部の段に平行することから、1号穴前庭の一部として形成されたものと考えられる。

また、1号穴前庭部が途切れた前方にはわずかではあるが、平坦面が残っている。2～4号穴ではこの部分が全く残存しないため、推測にすぎないが、4穴の前庭部を結ぶ墓道のようなものであった可能性がある。この斜面は元来、急斜面であるため、後世の崖崩れによって、その幅を減じたものと考えられる。この墓道状の部分は、さらに南にのび、支群南半を限る張り出しをのぼっており、第Ⅰ支群南東に位置する第Ⅱ支群に続いていたものと考えられる。この推測が許されるならば、第Ⅰ・Ⅱ支群は支群を異にするものの、共

通の墓道を利用する関係であったと考えられ
当時の家族構成・制度
を考える上で示唆的である。

しかし、この墓道状の通路は部分的にしか検出されておらず、第Ⅰ・Ⅱ支群間および第Ⅱ支群前方が破壊されているため、可能性があることを指摘するにとどめ、今後の調査例をまつことにしたい。

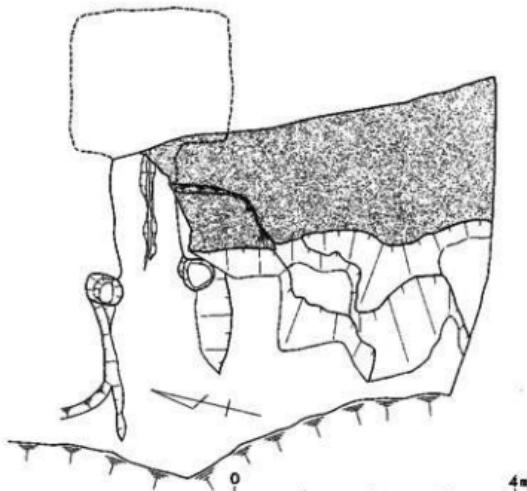


図9 1号穴前庭平面図 (1/80) アミ目は重機による削平面

1号穴からの出土遺物は以下のとおりである。(図10)

玄室——須恵器(杯蓋2、高杯2) 鉄製品(刀子1)

前庭部——須恵器(杯蓋1、小形杯1、高杯1、壺1)

土師器(壺口縁)

これらの遺物は、横穴内各地点で発見されているが、出土状態からは埋葬のどの段階に伴うものか明らかでない。

玄室内で発見された遺物は、1が口径約9.3cmと小形の蓋で、器壁やや厚く、端部はやや内湾している。外面上半をヘラケズリし、天井部はこのちにナデている。外面には×印のヘラ記号を有する。2は口径約1.0.2cmの蓋で、平らな天井部から直線的な体部が続いている。天井部ヘラおこし痕を残し、ノ印のヘラ記号を有する。3・4はいずれも口径1.4cm、器高1.0cm前後を示す高杯で、器形・技法とも酷似しており、同一の規格で製作されたものであろう。いずれもやや浅い杯部に低く大きく聞く脚部が接合する。脚部は端部で平坦面をなし、2方向に1段の透しを有するが、一方は長方形、他方は線状の透しと左右で異なっており、注目される。いずれの高杯も、長方形の透しに隣接して×印のヘラ記号を有する。刀子は残存長4.0cm、茎部幅0.7cmを測る小形のもので、刃部を欠いている。木質を残しており、柄等を有していたことが知られる。

前庭部で検出された遺物は、6が口径1.4.8cmを測る蓋で、天井部に輪状つまみを、口縁内側にかえりを有している。天井部に回転ヘラケズリを施す。7は高杯脚部で、器壁は厚手のもので、脚端部で平坦面をなす。1段3方向長方形の透しを有するものと考えられる。8は、口径7.6cmを測る小形の杯で、丸味をもった体部を有し、底部にヘラおこし痕を残す。9は、土師器甕片で、単純口縁の破片である。内外面とも回転ナデの痕跡をとどめる。10は、高台を有する壺下半で、径1.0.7cmを測る高い高台をもつ。内面底部には径3.5cmの円形に灰が被っており、これが頸部内面の最小径と考えることができ、こうした細い頸部を有する長頸壺等の器形であったと思われる。外面下半には×印のヘラ記号、底部に棒状の工具による刺突痕を残している。

注17

これらの遺物の時期は、玄室内出土の須恵器が、山陰の須恵器編年IV期に含めうるものであり、玄室内のどの人骨に伴うかは不明であるが、古墳時代後期後半に属するとして大過はないであろう。前庭出土の須恵器蓋は、出雲国庁編年1式、柳浦編年1式に含めうるもので、玄室内出土の遺物と、前庭部出土のものとでは時期差を認めることができる。この前庭出土の遺物が、追葬に伴うものか、埋葬終了後に墓前に供えられたものかは、出土状態からは明らかにできなかった。

注18

注19

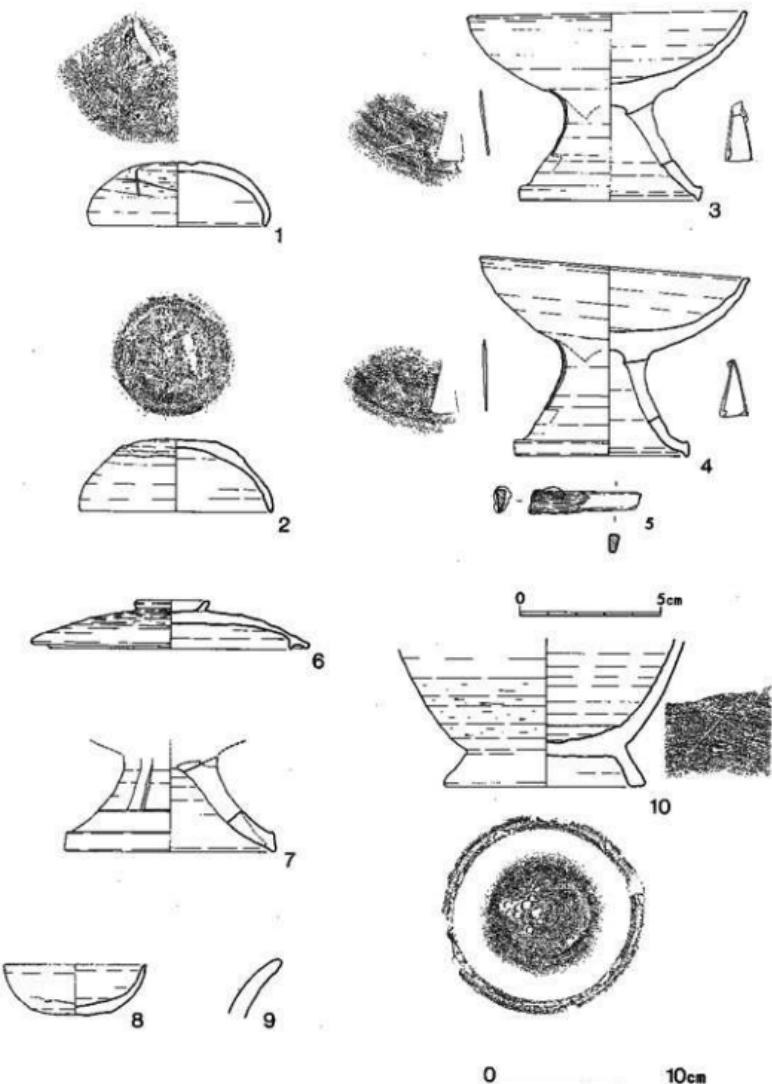


図10 1号穴出土遺物実測図 1～5は玄室内、6～10は前庭からの出土

表1 貝塚横穴群1号穴出土土器観察表

種類 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
10-1	杯蓋	9.3	—	3.5	丸味を帯びた小形の蓋で、口縁端部は内側にまがりこむ。外面／天井部へラケズリのちなでる。以下回転ナデ。内面／天井部ナデ調整。以下回転ナデ。	青灰色	石英・長石などや大粒のもの(φ1mm前後)や多い。	良好 好 外表面約半分自然釉のため光沢をもつ。	外面に×印のヘラ記号
2		10.2	—	3.9	やや小形の蓋で、天井部平ら。直線的な体部をもつ。外面／天井部へラおこし。以下回転ナデ。内面／天井部ナデ調整。以下回転ナデ。作り粗く、内面に粘土紐の接合痕あり。	淡灰 青色	石英・長石などや大粒のもの(φ1mm前後)含む。	普通 外表面天井色に黄白色の灰被り。	外面に印のヘラ記号
3	高杯	14.6	9.5	10.1	やや浅い杯部。脚に1段2方向の透しをもち、一方は三角形、もう一方は線形。杯内底部ナデ調整。他は全て回転ナデ。	青灰色	長石の細かい砂粒含む。	普通	脚部に×印のヘラ記号
4		14.1	9.3	10.8					
6	杯蓋	14.8	—	2.6	器高近く、天井部に輪状つまみを有する。端部内面にかえりをもつ。外面／天井部回転へラケズリ。他は回転ナデ。内面／天井部ナデ調整。以下回転ナデ。	淡青 灰色	長石の細砂粒(φ1mm以下)含む。	普通 外表面端部に三ヶ月形に灰を被る。重ね焼きの痕跡と考えられる。	
7	高杯	—	11.2	—	低く、大きく開く脚部。端部で平坦面をなす。1段3方向長方形の透しと考えられる。内外面とも回転ナデ。	灰色	長石の細砂粒わずかに含む。	普通	
8	杯	7.5	4.3	2.7	ごく小形の杯。外面／底部へラおこしか。後になでる。以上回転ナデ。内面／底部ナデ調整。以上回転ナデ。	淡青 灰色	石英・長石など微細なもの含む。		
9	壺 (土師器)	—	—	—	土師器壺口縁細片。内外面とも強いヨコナデ。	赤味がかった黄褐色	石英・長石(φ1mm以下)のもの多い。		
10	壺	—	—	10.7	高く大きくふんばる高台を有する體。長頸壺等の器種と考えられる。外面／胴部下半回転へラケズリ。それ以外は回転ナデ。内面／回転ナデ。	淡青 灰色	石英・長石の砂粒多い。	良好 好 内面底部に径3.5cmの円形に灰が被る。これが頭部の最小径と考えられる。	外面に×印のヘラ記号。高台内面に棒のものによる削り痕度を有する。

2. 2号穴

2号穴は、1号穴の北側に隣接し、1・2号穴主軸間の距離は羨門部で2.4mを測る。玄室床面での標高は3.3.2mで、1号穴よりわずかに高く、支群中では最高所に位置する重機によって羨道部の一部と前庭部を破壊されているが、羨道部下半と、そこに積まれた閉塞石はほぼ旧状を保っている。

玄室は、床面わずかに横長の長方形で、S-71°-Wに開口する。奥行2.1m、幅2.4mを測る。形式は、三角形断面形平入形式である。前壁は床面からほぼ垂直に近く立ちあがったのちに屈曲して、丸味をおびて棟の線に至っている。奥壁は屈曲することなく、丸味をもって棟の線に至っている。側壁は南壁がほぼ直立するのに対し、北壁は大きく内傾している。棟の線は長さ1.6mを測る。玄室高は1.4mである。風化した岩層中に穿たれていますため、ノミ痕等工具痕は残っていない。床面には幅0.08m、深さ0.04mの排水溝が掘られている。排水溝は、奥壁やや南寄りから羨門までの玄室・羨道を貫くものと、玄室四壁をめぐるものとであるが、玄室南半には、この排水溝を切って深い溝が掘られている。これは後述する箱式石棺を組むための溝と考えられる。この溝の切合関係から、当初排水溝を掘りながらも、後に箱式棺を組むにあたって、この排水溝を破壊して棺材を受ける溝を掘ったものとわかった。このことから、この横穴掘削当初には、玄室内に箱式棺を組むことは予定されていなかったことがわかる。この箱式棺棺材は後世に攪乱を受けているが、南東隅に旧状を保つ石材が1枚だけ残存していた。

羨道は基底部で1.5mを測り、羨道天井部は剥離しているものの、横断面は半円形を呈している。幅は1.1mから0.9mあり、羨門部がわずかに狭くなっている。羨門部で羨道は大きく広がり前庭部に続くが、この部分に1号穴と同様、深さ0.05mの方形の割り込みがある。しかし、この部分には1号穴のような板状の石材は残存していない。

前庭部は、残存長1.6m、幅2.0mで、それ以上は重機によって掘削され、遺存していない。

玄室内には、後述するが後世の盗掘により著しく攪乱されており、箱式棺棺材が散乱した状況である。これら石材に混じって、須恵器杯2、同碟1、土師器杯破片および人骨片が検出された。須恵器は玄室中央にほぼまとまって検出されている。杯1は石棺溝内に落ち込み、杯2は2つに割れた状態で検出された。碟も転倒している上に口縁の一部を欠いている。土師器杯は、玄室内各地点で細片となって検出されている。人骨は、大腿骨片が玄室北東隅で、骨粉状に細かく碎けたものが、石棺溝内に落ちこんでいた杯1の中に残存

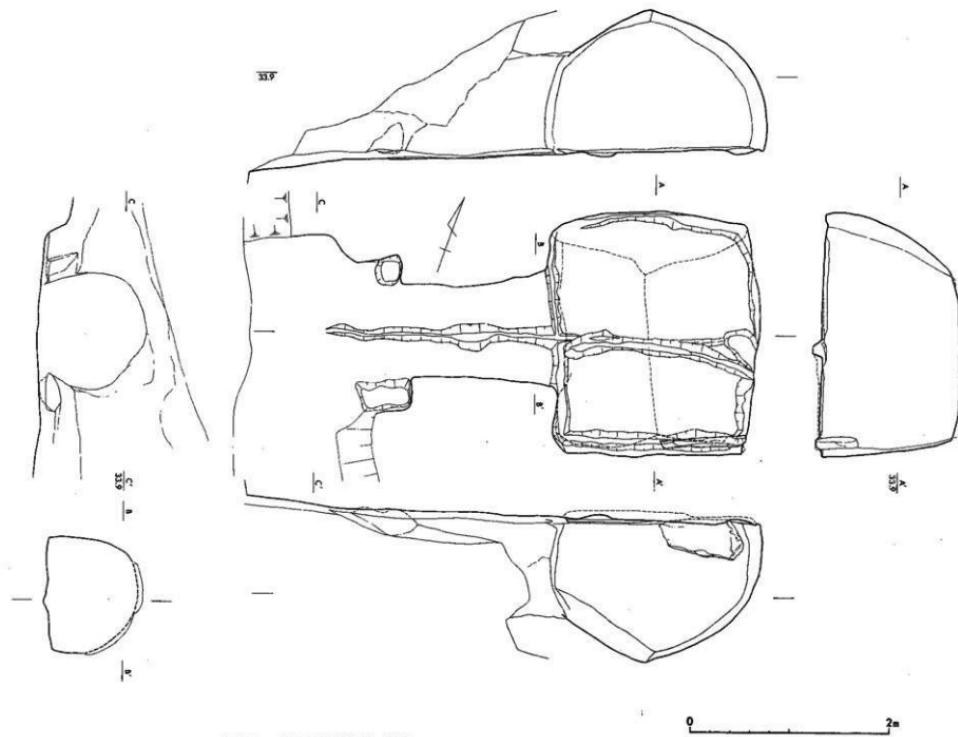


图11 2号穴虫图 (1/40)

していた。人骨はいずれも小片のため、埋葬者数、性別等は不明で、わずかに大腿骨片の厚味から成人域に含まれるものであろうという（第IV章参照）。

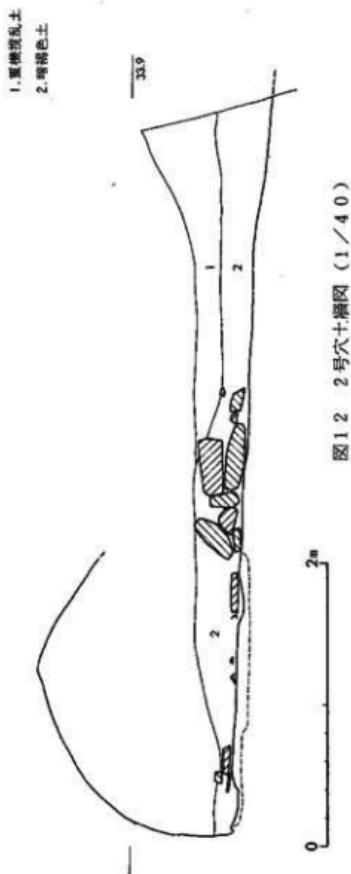
前庭部・羨道部には重機によって掘削された土砂が堆積している。この下層には角礫を含む暗褐色土が床面まで堆積している。ここでは、土層上部が重機によって著しく攪乱されているため、土層から追跡等の痕跡を認めることはできなかった。また、玄室内も著しく攪乱を受けており、分層は不可能であった。

玄室内に堆積する暗褐色土は、横穴の掘り込まれる緑色凝灰岩上層の岩層のブロック状に割れた頁岩を著しく多く含んでおり、この横穴がかなり長期間にわたって開口していた時期のあったことがわかる。玄室内が著しく荒らされていることから、ある時期に盗掘を受け、その際に開口したまま放置され、自然の流上によって埋没したものと考えられる。

また、1・2号穴の新旧関係を土層で確認するために、両穴前庭を横断するセクションベルトを設定したが、重機による攪乱が著しく、明らかにできなかった。

羨道は石材を積んで閉塞している。羨道は一部重機によって破壊されてはいるものの、閉塞施設そのものには攪乱は及んでいない。閉塞石は、長さ1.5m、幅は羨道一杯の1.1mの範囲に積まれている。石は長さ約40cm、幅約20cm程度の偏平なもので、角のない河原石を主としている。

閉塞石は、下段にやや大形の石を積むものの、2段程度しか残存しておらず、石の配列もかなり乱れている。高さも羨道中央では30cmほどしかなく、玄室内が攪乱されていることから、閉塞石も盗掘時に現状を変えられた



ものと考えられる。また、前庭部でも石が検出されており、やはり盗掘時に閉塞石の一部が投げ出されたものであろう。

この閉塞に使用された石は約50個である。

この閉塞石の前方、羨門部床面両脇には1号穴と同様に掘りくぼめられている。石材は残存しなかったが、本来は1号穴と同様にこの穴に石材を立てて、門状の施設を設けた上に、その内側の羨道部に石材を積み上げるという二重の閉塞を有していたものと考えられる。

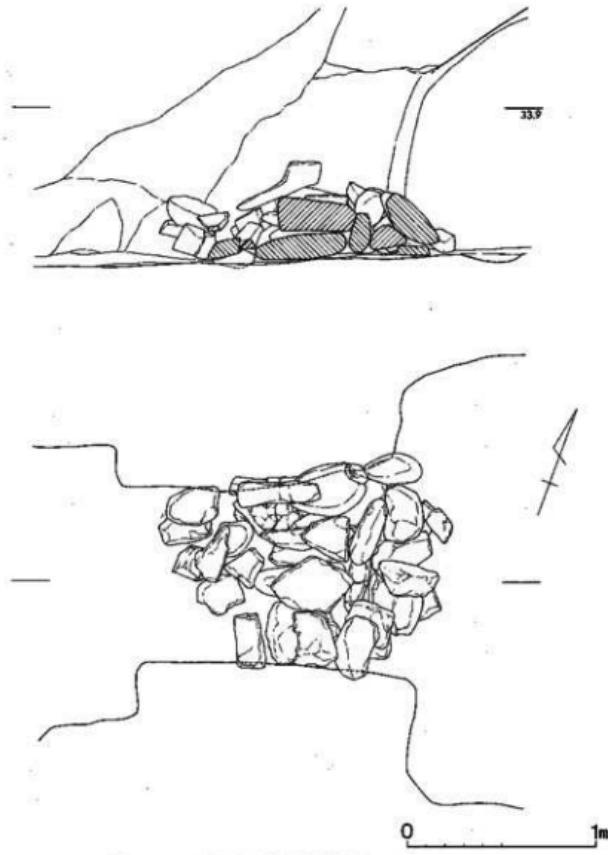


図13 2号穴羨道部閉塞状況 (1/30)

玄室内には、板状の石材が散乱しており、細かく破碎したものも含めて約40枚に及んでいる。いずれの石材も厚さ8~5cm程度のものである。玄室南東隅では溝に立てられた石材が1枚残存しており、この1枚だけが原位置を保っていた。このことから、玄室南半に深く掘り込まれた溝にこれら石材が立て並べられて箱式棺を構成していたものと考えられる。これら石材の中には、現状では割れているが接合する資料もあり、大形のものでは長辺130cm、短辺60cmに及ぶものもある。しかし、石材は基本的には60×40cm程度のものを使用している。このような石材を棺長辺に2~3枚ずつ、短辺に2枚ずつ配して棺としていたようである。しかし、盗掘に際して棺材は玄室内各地点に散乱させられ、この時に石材の一部は割れてしまったものと考えられる。

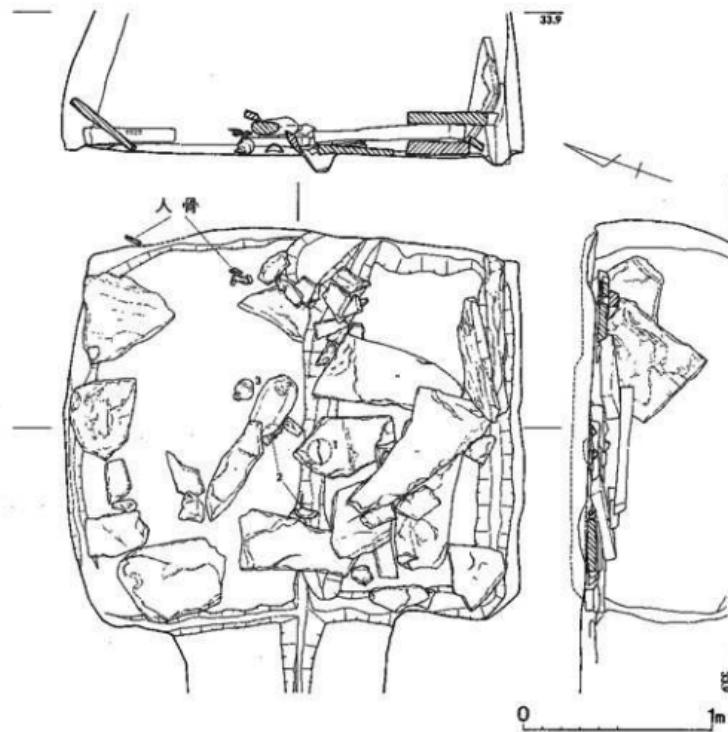


図14 2号穴玄室内石材散乱状況(1/30) *、**はそれぞれ接合資料

玄室内に据えられた箱式棺は、棺材が散乱しているものの、おおむねの現状は知ることができる。

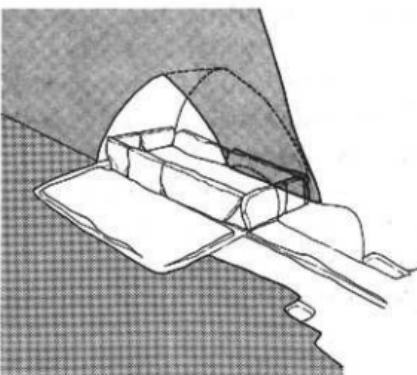
この箱式棺は、床に掘られた溝から、内法長1.7m、同幅0.8mと考えられ、南東隅に1枚だけ原位置に残る石材から、石棺深さは約0.4mと推測できる。玄室内に残存する石材は、棺身部に相当するもので、元来蓋石は有さなかったものと考えられる。

横穴掘削当初には、玄室内に箱式棺を据える予定がなかったことは、

床面の排水溝を石棺用の溝が破壊していることから明らかである。しかし、この棺が埋葬のどの段階に伴うものかは明らかでない。

ともあれ、玄室内にこうした施設がしつらえられる例は数少なく、注目される。^{注20}

図15 2号穴内箱式棺復元模式図



2号穴からの出土遺物は以下のとおりである。(図16)

玄室——須恵器(杯2、碗1)

土師器(杯破片)

須恵器杯1は、石棺材が移動させられた際に、玄室中央の石棺溝内に転落していたものである。静止糸切りによる平坦な底部から、ゆるやかに立ち上がる体部は口縁部で内湾する。体部内外面とも強い回転ナデの痕跡をとどめ、凹凸著しい。内面底部にはナデ調整を施す。色調は暗青灰色を呈するが、口唇部をめぐるように茶褐色の部分を残しており、同器種のものを重ね焼きしたものと考えられる。胎土は長石の砂粒をわずかに含むが全体に精選され密で、焼成も堅緻である。

2も1と同様の須恵器杯であるが、玄室ほぼ中央で2つに割れた状態で検出された。回転糸切りによる平坦な底部から大きく立ち上がり、直線的なまま口縁部に至っている。体部内外面ともに回転ナデを施してはいるが、痕跡はさほどではない。内面底部にはナデ調整を施す。色調は淡青灰色を呈し、胎土は長石の砂粒を含むものの密、焼成は普通である。

3は須恵器碗で、玄室中央付近で横転した状態で検出され、口縁破片は奥壁寄りにあつ

た。糸切りによって切り離す平坦な底部から小ぶりな体部に至っている。頭部は細く短く、わずかに内湾しながら開く口縁部に続いている。内外面とも回転ナデの痕跡をとどめるが体部下半はヘラケズリを施し、底部には回転糸切り痕を残す。色調は黒灰色を呈し、胎上は微砂粒を含むものの密で、焼成は良好である。

4は土師器杯口縁で、端部丸くおさめている。内外面とも回転ナデを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土密、焼成は良好である。他に図示できないが、同様の別個体破片がある。^{註21}

上記の須恵器の時期は、1・2が出雲国庁編年第3式、柳浦編年第3式に属し、3もほぼこの時期に相当しよう。柳浦編年によれば、8世紀中葉の実年代が比定でき、奈良時代に入ってからの遺物と考えられる。2号穴からは、これらを潮流する時期の遺物の出土はないが、追葬あるいは埋葬終了後に供献されたものと考えられる。

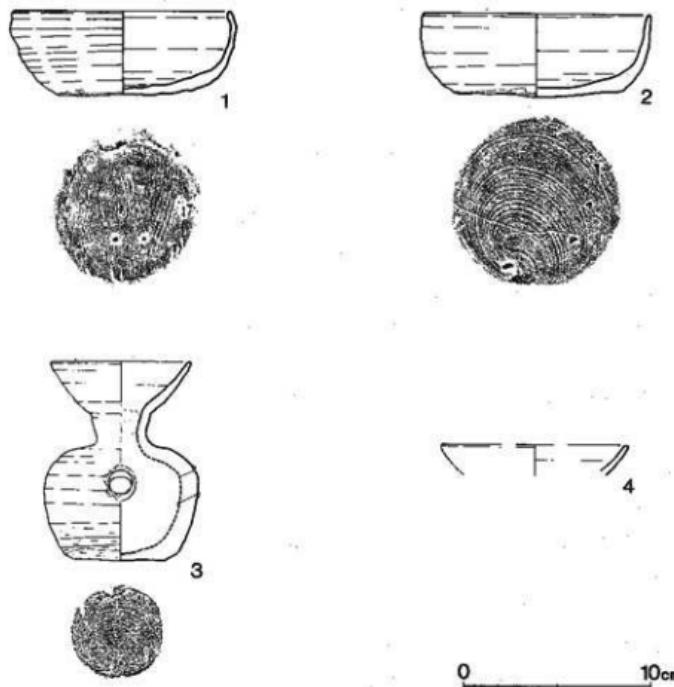


図16 2号穴出土遺物実測図(1/3)

3. 3 号 穴

3号穴は、2号穴の北側にあり、2・3号穴主軸間の距離は羨門部で3.9mを測る。玄室床面での標高は3.29mで、2号穴よりわずかに低く、1号穴とほぼ等しい。重機によつて前庭部と羨門部を破壊されている。

玄室は支群中で最も小さく、床面はひずんだ正方形を呈し、S-69°-Wに開口し、奥行1.9m、幅2.0mを測る。形式は、三角形断面形平入形式である。前壁と奥壁は床面からほぼ垂直に近く立ちあがったのちに屈曲して、丸味を帯びて棟の線に至っている。側壁は北壁がほぼ直立するのに対し、南壁はやや内傾する。棟の線は長さ1.6mを測る。玄室高は1.25mと最も低い。壁面でノミ痕等は観察できない。床面には幅0.1m、深さ0.05mの排水溝が掘られている。排水溝は玄室・羨道を貫いて羨門に至るものと、玄室四壁をめぐるものとである。羨道が北側に偏って付けられており、羨道の中央を貫くように排水溝が掘られているため、排水溝によって区切られる屍床状の部分は北側が幅0.7mであるのに対し、南側が1.0mと広くなっている。

羨道は、基底部で長さ1.3mを測り、横断面は円形に近い。羨道南側床面は加工が粗く、かなりの凹凸を残している。羨門部の前方には前庭部が続いていたものと考えられるが、残存していない。羨門は基底部を残すのみであるが、両脇に不正な円形の穴が残っており、本来は1号穴と同様、石を立てる門状の施設があったものと考えられるが、他のものと較べると、やや小さい。さらにこの部分床面には、主軸と直交するように溝が掘られている。支群中他の横穴全てに見られる羨道部に石を積んでの閉塞が、この3号穴では認められないことから、ここではこの溝に木板等を立てかけて閉塞していた可能性がある。ただし、ここでも以前に開口していたと考えられ、その当時に閉塞用の河原石が持ち去られた可能性も否定できない。

この横穴は、小形であること、玄室が羨道に対して偏った位置に取り付くこと、排水溝によって区切られる屍床状の部分が左右で幅が大きく異なること、羨門部で栗石を積まず木板等で蓋をする閉塞をおこなっていた可能性があることなど、横穴としては同じ形式に属しながらも、趣を異にしている。

玄室内からは、須恵器片2片が検出されたが、いずれも原位置にあるものではない。また、人骨は全く遺存していなかった。後世の盗掘を示す遺物こそ認められないが、玄室内の示す状況から、徹底した盗掘を受けているものと考えられる。

その他、羨門部は破壊されているが、羨門向かって左上方から4号穴にかけて、横穴掘

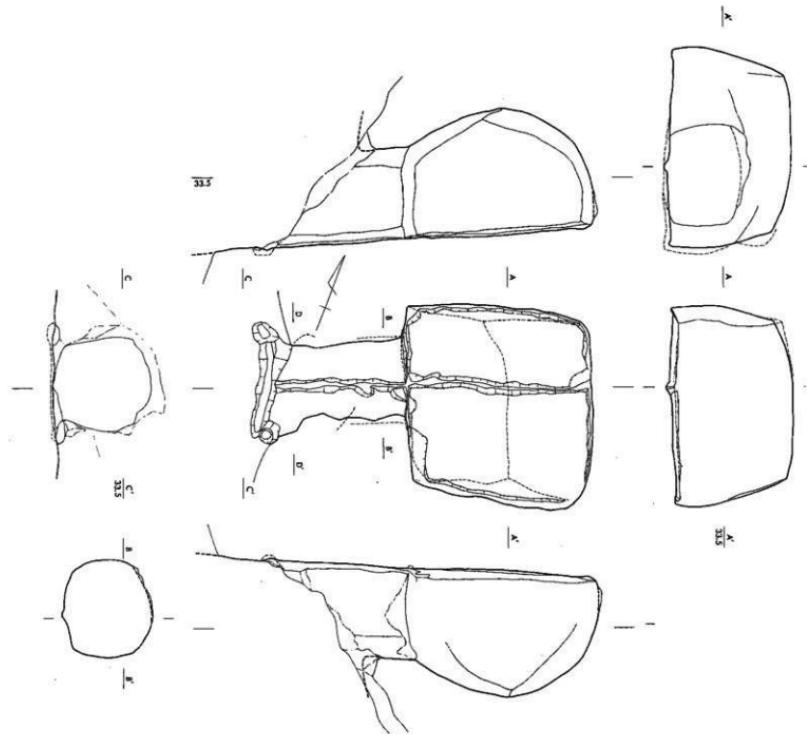


图 17 3号穴实测图 (1/40)

0 2mm

削当初の面が残っている。この面は3号穴の墓壁と考えられ、4号穴にも続くものとなっている。詳しくは後述するが、現状では3・4号穴で共有すると考えられるこの墓壁は、本来は支群全体に及んでいたものと考えられる。

3号穴土層は、前庭部が重機によって掘削されて残存しないが、羨道・玄室はこの掘削から免かれており、観察することが可能であった。

羨門部での横断セクションでは、上部にわずかに重機によって移動された土砂が流れこんではいるが、それ以下は発見以前の土層である。2～5層は、褐色系の土層で、層内に多くの砂利を含んでいる。他の横穴でも観察されているように、この上層はある期間、開口する時期があったことを示す層と考えられ、この横穴も盜掘を受けていると判断された。第4層は、U字形の落ち込みを示し、あるいは盜掘の1回を示すものかも知れない。6・7層は、砂利を少量しか含まないが、玄室の状況からは、盜掘以前の土層と判断するには至らない。

縦断セクションは、単純な堆積状況を示している。上記2・5層が羨門部では天井まで堆積し、玄室奥へゆくにつれて、浅くなりながらも、玄室全体を覆っている。6層は羨道両脇にのみ認められ、縦断セクションでは観察できない。第7層は最下層に薄く堆積し、玄室最奥部までは至らない。この層中にはあまり砂利は含まれず、粘性が高い。

また、この3号穴では、他の横穴と異なり、羨道床面に溝が掘られており、この溝に木板等を立てかけての閉塞が想定できるが、盜掘の際に搅乱を受けていると考えられる縦断セクションでは、そうした痕跡を認めることはできない。

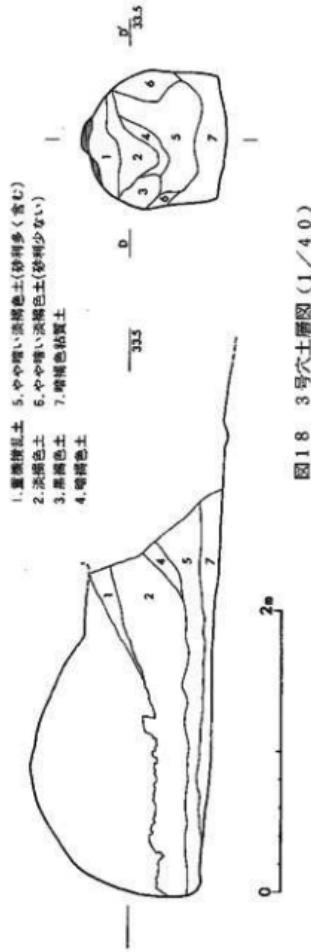


図18 3号穴土層図 (1/40)

3号穴は後世の盗掘を受けており、玄室内から須恵器が小片となって検出されたにすぎない。いずれも原位置と考えられる出土状況ではなかった。(図19)

1は、杯と考えられるもので、底径6.0cmを測る。底部にヘラおこし痕を残し、それ以上は回転ナデで仕上げている。内面底部はナデ調整を施すがそれ以上は回転ナデで仕上げる。色調は、淡青灰色を呈し、胎土は石英・長石の微細なものをやや多く含む。焼成は良好で、外面底部にかすかに灰を被っている。

2は、壺のような器種と考えられ、大きく張る胴部をもち、推定最大径22cmを測る。内外面とも強い回転ナデで仕上げているが、外面上部に暗緑色の自然釉を被っている。色調は、外面黒灰色、内面暗灰色を呈し、胎土は径1mm前後の長石が目立つ。焼成は良好である。

これらの遺物の時期は、杯と考えられる1の器形の推定が正しければ、山陰の須恵器編年IV期に含めうるもので、古墳時代後期後半に属し、1号穴玄室内の遺物とはほぼ同じ年代観を示すものといえる。
注17

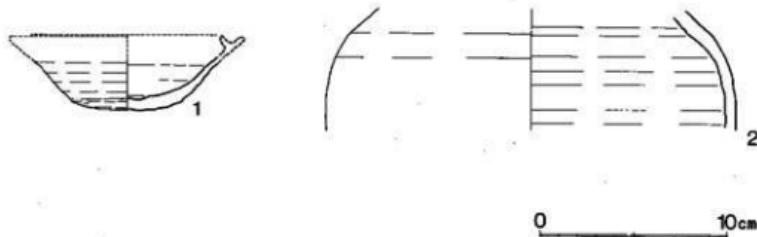


図19 3号穴出土遺物実測図 (1/3)

4. 4号穴

4号穴は、支群中最も北端に位置し、玄室床面での標高は3.23mである。重機によつて前庭部の前方を破壊されているが、その他の箇所はほぼ現状を保っている。

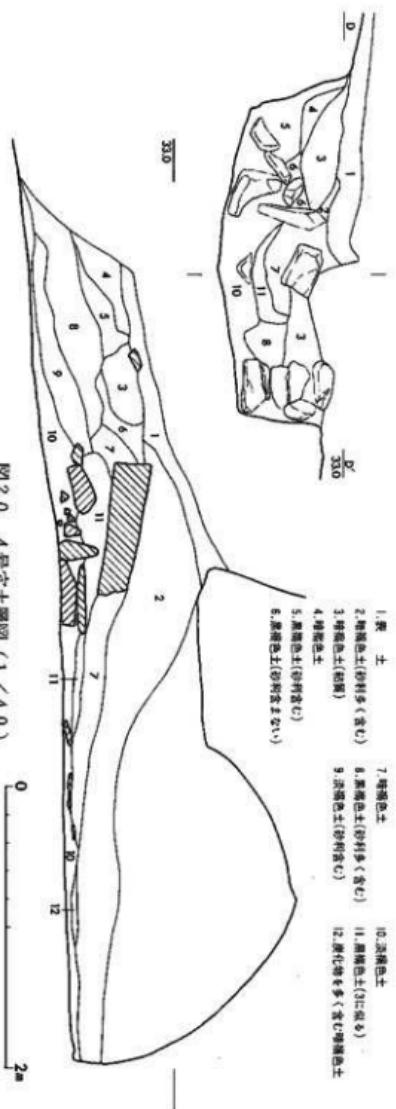
玄室は床面は正方形を呈し、S-50°-Wに開口する。奥行2.4m、幅2.3mを測り、支群中では最も大きい。形式は、三角形断面形平入形式である。前壁と奥壁は南側ではほぼ垂直に近く立ちあがったのちに屈曲して、丸味をおびて棟の線に至っているが、北側では屈曲することなく丸味をおびたままで棟に至っている。側壁はやや内傾するが、南側の方が傾きは大きい。棟の線は長さ1.5mを測り、玄室高は1.7mである。穿たれた壁面の風化が著しいため、ノミ痕等工具の痕跡は認められなかった。床面には幅0.1m前後、深さ0.05mの排水溝が掘られている。排水溝は、奥壁中央から前庭部を貫くものと、玄室四壁をめぐるものとである。玄室四壁をめぐる排水溝は、玄門付近で玄室中央を貫くものに合流している。

羨道は、基底部で長さ1.4m、幅0.9m、高さ1.0mを測り、ほぼ原形をとどめている。横断面形はやや張り出す長方形を呈する。また、床面には閉塞用の石材が積まれて残っている。羨道は羨門部で大きく広がり、前庭部に続くが、この部分に長径0.4～0.5m、短径0.3～0.4m、深さ0.1mの穴が掘り込まれており、北側の穴には板状の石が立てられた状態で遺存している。しかし、南側の板石は、羨道内に倒れこんでいる。

前庭部は長さ2.6m、幅2.2mである。この前方にもさらに続いていたものと考えられるが、重機によって削平されて残存しない。前庭部の両脇は、上部を削平されるものの、立ち上がりを有している。この立ち上がりは北側では前庭部床面から約0.3m立ち上がって、幅約0.3mの平坦面に至り、さらに立ち上がり、残存高0.7mを測るが、これ以上は重機による削平を受けており、旧状は不明である。しかし、現状でも南側のものよりかなり高く、1号穴南側の張り出しに対応する支群北端を限る施設と考えられる。また、前庭床面には玄室・羨道を貫く排水溝が続いているが、前庭部で幅を著しく広げるとともに、深くなり、他の横穴では認められない特徴となっている。

羨門部は、重機による削平を免かれたため、羨門両側に割込みが残存している。北側では、床面の穴に立てられた板石が、この割込みにはめこまれるように立てられている。割込みは羨門両側のみで、上部にはないことから、羨門部両側に立てられる板石を受けるためのものと考えられる。このような羨門の構造は、比較的保存状態の良好な1号穴羨門部南側での状況と類似する。

図20 4号穴土層図 (1 / 40)



4号穴の土層は、前庭部前方を重機によって削平されたのみで、比較的旧状をよく保ち、観察可能であった。羨門部での横断セクションでは、左右の門柱の板石を支える石材の中間および上方は、土層が乱れている上に南側の板石が羨道内に倒れこんでおり、明らかに後世の攪乱を受けている。ことに羨道内に倒れこんだ門柱状の石材の南側にパラスを多く含む暗褐色土が床面近くまでえぐりこむように堆積しており、この層以上が盜掘の際に掘削された層と考えられる。盜掘者は、羨門むかってやや右側から掘りこんだため、南側の門柱状の石材につきあたり、これを羨道内に倒しこむようにして玄室内に侵入したものと判断された。

縦断セクションでは、前庭部は複雑な土層の堆積状況を呈し、攪乱が度々に及んだことを示している。玄室内では、地山上に堆積する淡褐色土層上面に炭化物を多く含んだ層が認められ、火を燃やした痕跡と考えられる。この面から土師質土器片、磁器片および貝殻多数が発見されており、盜掘者はこの横穴内で一定期間、生活していた可能性がある。これらの遺物から、盗掘は、中・近世になされたものと考えられる。

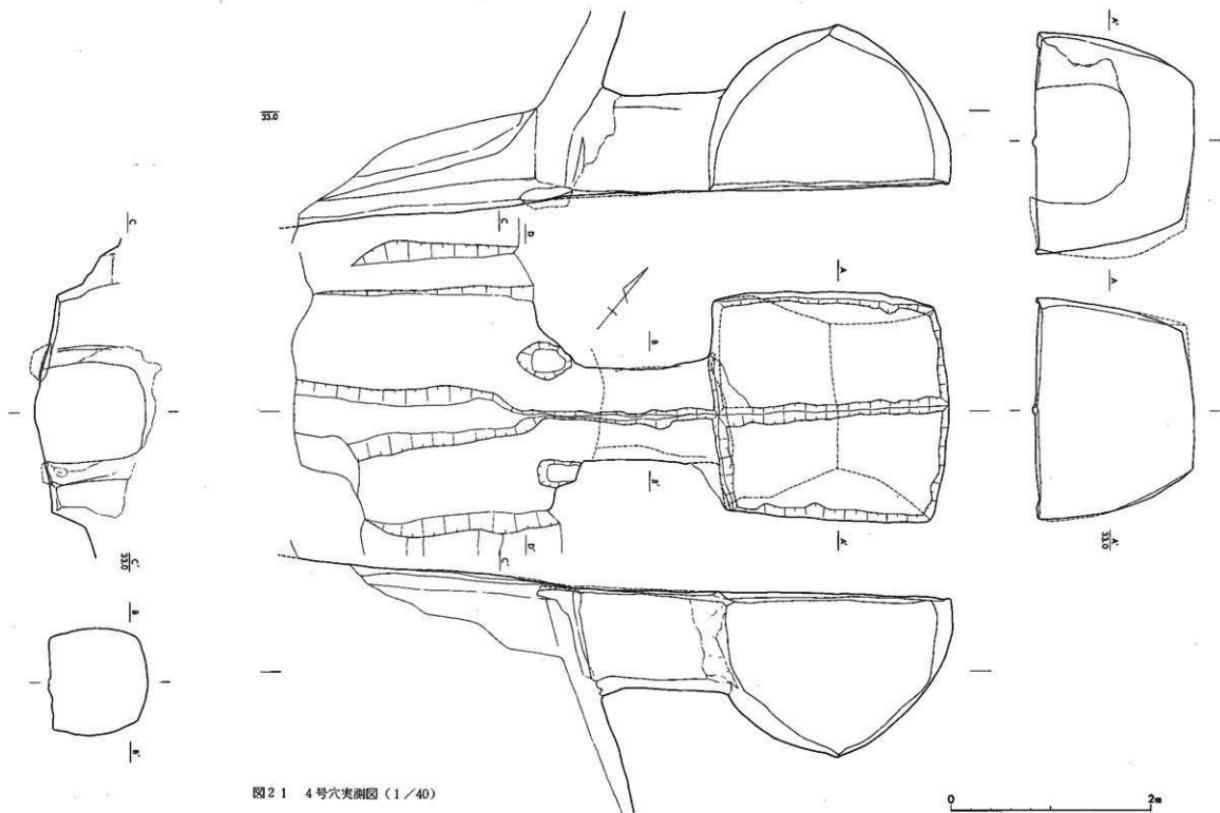


图21 4号穴实测图 (1/40)

0 2mm

羨道では石材を積んではいるが、ここで使用された石材は、1・2号穴に較べると少量で、閉塞するまでには至っていない。門状の施設を構成する南側の板石が羨道内に倒れこんでいる状況などから、後世の盗掘に際して閉塞石が、外部へ取り除かれた可能性がある。閉塞に使用された石材は、長さ約40cm、幅約20cm程度の偏平なもので、角のない河原石を主としている。この閉塞石の前方、羨門部には床面の穴に板石が立てられて、門状の施設があったものと考えられるが、南側の板石は羨道内に倒れこんでいる。1号穴と同様の構造をとるならば、両側にたてられた板石にさらに石材を架けわたして門状の施設をな

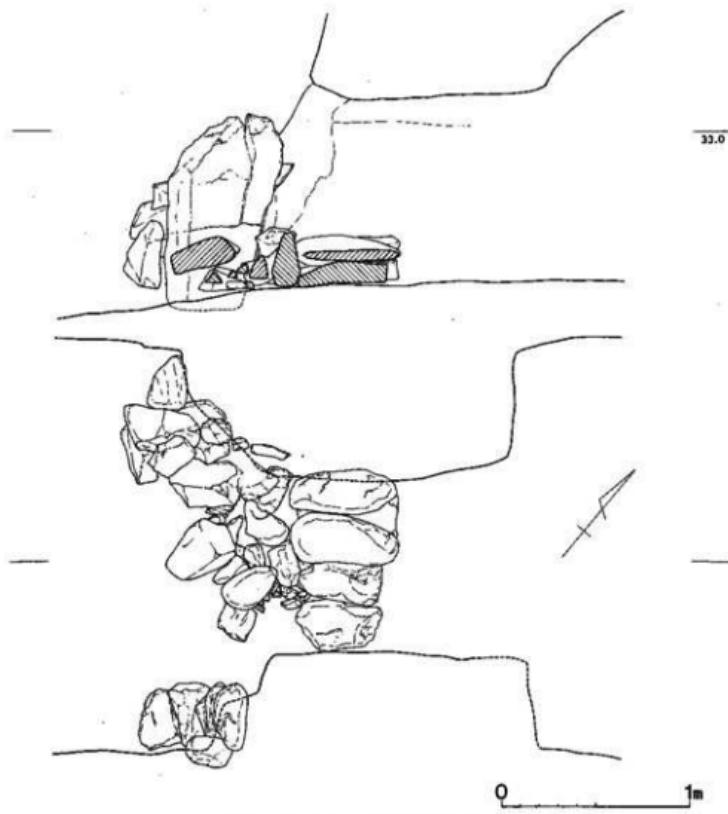


図22 4号穴羨道部閉塞状況 (1/30)

していたものと考えられるが、架構した石材は残存せず、盗掘の際に除去されたものと考えられる。奥門南側の板石の外方には、石材を積み重ねて、この板石が倒れるのを防いでいる。

ここで使用された石材は約40個である。

4号穴からの出土遺物は以下のとおりである。（図23）

玄室——須恵器（杯片2）、金環1、土師質土器片3、磁器片4、貝殻

これらの遺物のうち、須恵器、金環は横穴への埋葬に伴うものと考えられるが、それ以外の遺物は後世のものと考えられる。

須恵器1は、杯等の口縁と考えられ、口径は推定11cmを測る。内外面とも回転ナデで仕上げ、やや浅い杯部をなしている。長石の砂粒をやや多く含み、淡青灰色を呈する。須恵器2は、杯等の底部かと考えられるが、器種は不明である。底部径約4cmを測る。内外面とも回転ナデで仕上げるが、外面下半はかすかにヘラケズリの痕跡を残し、内外面底部は不定方向のナデ調整を施す。胎土は長石の砂粒をわずかに含む。色調は淡青灰色を呈している。

金環3は、径約2.0cmを測り、銅芯は偏平で、断面の長径0.7cm、短径0.5cmである。表面に有機物が厚く付着し、鍍金が認められる部分はごくわずかである。

土師質土器4は、底径約5.5cmを測り、回転糸切り痕を残している。口縁部を欠いているが、底部から直線的に開く器形と考えられる。胎土は長石などを含み砂質である。色調は淡褐色を呈する。土師質土器5は、底径約6cmを測り、回転糸切り痕を残すが4に較べて密な痕跡となっている。

磁器6は、皿様のものの口縁部で、灰色の釉薬が厚くかかり、内外面とも凹凸が著しい。口径は約12cmを測る。口唇部外面に段を有する。磁器7は、碗と考えられるもので、ごく薄い緑色の釉薬がかかっている。外面に紺色の染付がある。口径約10cmを測り、やや深い器形である。磁器8は、やや小ぶりな碗、あるいは酒盃と考えられるもので、径2.5cmほどの華奢な高台がつく。ごく薄い緑色の釉薬がかかっている。外面に紺、赤、海老茶、黒、緑を使って文様が描かれる。磁器9は、香炉と考えられるもので、底径約4cmを測る。全体に器壁は厚い。外面にはごく薄い青緑色の釉薬がかかるが、内面は無釉である。外面には紺色で文様が描かれる。

これらの遺物のうち、1～3は横穴に伴うものと考えられるが、いずれも時期を考えるには適当でない。その他の土師質土器、磁器は、後世のものであるが、土師質土器2点は

このうちでも、少し遡った時代を考えることができるかもしれない。磁器片は、玄室内上層の炭化物や貝殻とともに検出されており、盗掘者がこの横穴内で起居した際の遺物と考えられる。

遺物からは具体的に横穴構築の時期を知ることはできないが、横穴の形式等からは、他の横穴とさほど隔ることなく造られたと考えられ、古墳時代後期後半に属するものであろう。

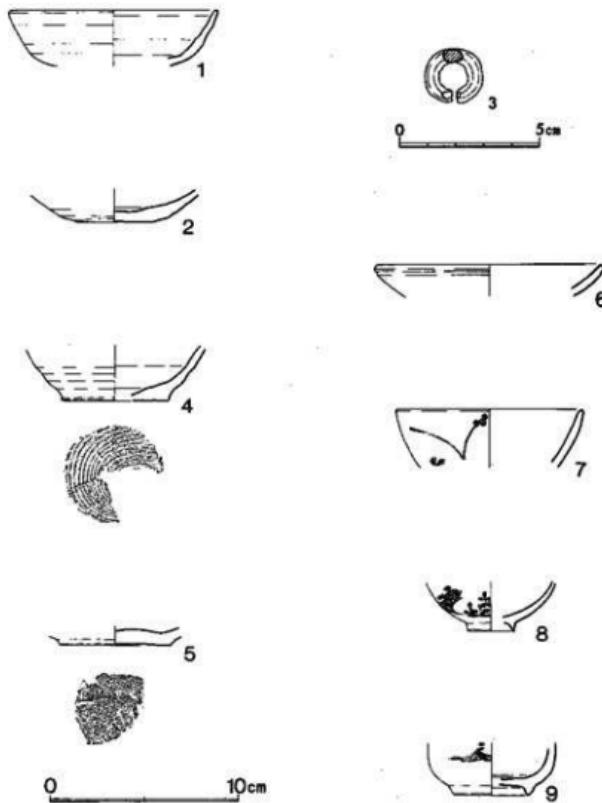


図23 4号穴出土遺物実測図 (1/3)

3・4号穴の羨道掘込み面は上方に広く平らな面として続いている。この面は風化しているが、自然の崩壊などでできた面ではなく、横穴に付属する施設と考えることができ。3・4号穴では、この面を共有しており、重機によって削られてはいるが、削り残された面を観察すると、この面は3・4号穴のみでなく、1～4号穴の支群全体で共有するものである。この墓壁は、その両端で湾曲し、支群南北端を限る張出しに続いている。保存状態のよい4号穴では、羨門上方1.7mまで残存しており、これ以上は重機によって削り取られてはいるものの、約1mは緑色凝灰岩の層が続いており、各横穴羨門上部に3～3.5mの幅で墓壁が存在したと想像することができる。墓壁下部では各横穴前庭部両脇の立ち上がりが張り出しており、支群南北端を限る大きな張り出しの間に小さな張り出しを作り、横穴相互の境としていることになる。

この支群の横穴は、墓壁を共有するとともに、4穴が羨門をほぼ一列にそろえていることから、横穴の造営に際して、まず斜面を掘りくぼめ、両端に張り出しを掘り残して、支群の墓域をあらかじめ設定していたものと考えられる。また、羨門部は平面的にはほぼ一列にならぶものの、高さはかなりまちまちであることから、横穴は必要に応じて、この墓域内に掘りこんでいったものと考えられる。

こうした墓域内に掘り込まれた4穴の横穴は、相互に何らかの関係を有する人々の墓地と考えられ、当時の家族関係を考える上で示唆的である。

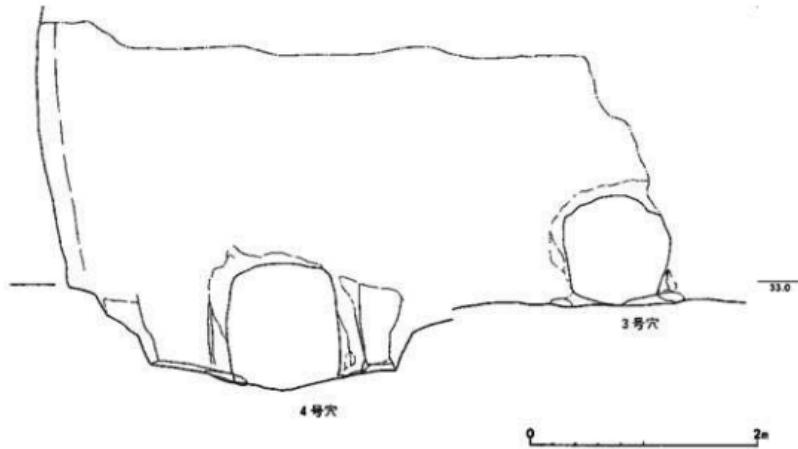


図24 墓壁正面図(1/50)

IV. 貝塚横穴群出土の人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井上 晃 孝

1号穴出土人骨

1. 1号穴出土人骨の概観

横穴内には玄室右手前隅（A地点）、玄室左手前隅（B地点）、さらに玄室中央部やや奥の地点（C地点）の3箇所に人骨が散在している。

人骨の配置をみると、各地点とも極めて不自然であり、白骨化した段階で後日人為的に無難作に整理、移動された形跡が認められる。とくにA地点とB地点では、頭骨を中心と長管骨、その他の骨が一箇所にまとまって散在しており、C地点では頭骨の一部と下頸骨2個、その他の骨がわずかに散在している。

これら各地点の残存骨は完形のものは1つもなく、欠損骨が多く、消失骨がかなりみられるが、残存骨を列記して、以下検討することとする。

2. A地点の出土人骨（図版16）

1) 残存骨

- ①頭蓋骨：頭骨は大きくなき欠損しており、残存部位は左右の側頭部から後頭部にかけての部位である。上頸骨、下頸骨はないが、遊離歯牙が2個検出され、部位と歯名は右上顎犬歯と右上顎第1か第2の大臼歯である。

- ②椎骨：胸椎骨1個のみで、その他の頸椎骨、胸椎骨、腰椎骨、仙骨、尾骨らは

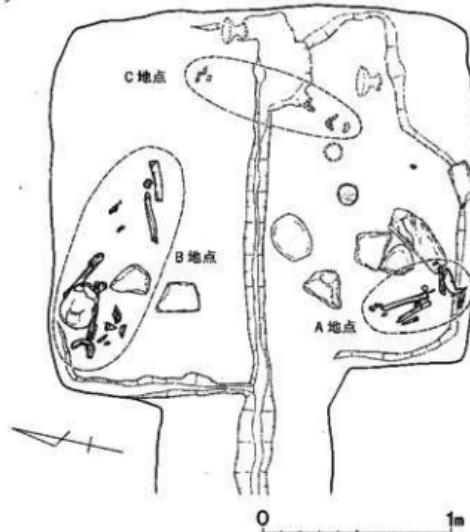


図25 1号穴内人骨出土状況 (1/30)

消失している。

③胸 部：折損した左右不明の肋骨片数個が残存している。

④上肢骨：鎖骨は左右とも骨片化、上腕骨は左右とも近遠両端部を欠き、骨体部のみである。その他左右不明の脛骨片の一部が残存する。

⑤下肢骨：下肢骨としては左右の脛骨体の一部が残存する。

2) 性 別

欠損した頭蓋骨について形態学的にみると、左右の乳様突起は弱く突隆しており、外後頭隆起はほとんど突隆してなく、上項線、下項線と後頭平面はともに発達が極めて悪いことから、女性と推定される。また、残存歯牙も小さく女性と推定される。

3) 年 令

残存頭蓋冠の矢状縫合をみると、頭頂部から後頭部にかけて癒着がみられる。また残存歯牙の右上顎の第1か第2の大臼歯の咬合面の咬頭はなく、水平化し、象牙質が全面的に露呈しているので熟年者が推定される。

4) 身 長

完形の四肢骨がないので不明であるが、残存骨の長管骨を見る限りでは、骨の大きさからごく平均的な身長を有した者と推定される。

5) その他の

血液型検査資料としては不適があるので、血液型は不明である。

3. B 地点の出土人骨（図版15）

1) 残存骨

①頭蓋骨：右顔面、左側頭骨と頭蓋底部の一部が欠損しているが、他の部位は残存する。残存左上顎部には歯牙の付着はない。

下顎骨は2つに折損しており、左右の下顎枝も欠損している。左上顎の犬歯、第1小臼歯は歯根のみが残存する。

頭骨の計測値 (mm)

最小前頭巾 103.0 頭蓋最大長 193.0

最大後頭巾 118.6 両耳巾 122.0

乳様巾 124.2

②椎骨：椎弓部の一部が1個残存する。

③胸郭：折損した左右不明の肋骨片少數が残存する。

④上肢骨：左右の鎖骨体の一部、左右の上腕骨は骨体から遠位部位と左右不明の桡

骨体の一部が残存する。

- ⑤下肢骨：左脛骨（仙腸関節から脛関節）の一部、右大腿骨（近位部から骨体）、左右の脛骨体と左右不明の腓骨の一部のみ残存する。

2) 性別

頭蓋骨は欠損部はあるが、かなり保存状態がよい。

①形態学的検査

前頭結節の隆起は著明に発達、乳様突起はかなり強大、外後頭隆起は弱い（男性は一般的に強く突起する）、上項線、下項線と後頭平面はよく発達している。

以上の特徴は男性が具備する条件であるが、大約一致する。

②男女対照値との比較

項目	対照値		本屍骨
	男性	女性	
頭蓋最大長	178.9	170.8	193.0
頭蓋最大幅	140.3	135.9	約148.0
最小前頭幅	93.2	91.0	103.0
両耳幅	108.4	104.2	118.6

(数値:mm)

以上から男性と推定する。

3) 年令

頭蓋冠の矢状縫合は一部癒着しているので壮年者と推定される。

4) 身長

完形の四肢骨がないので不明であるが、右大腿骨は完形ではないが、欠損部位を考慮して参考までに身長を算出してみると、大約155~160cm位となる。

5) その他

- ①血液型は不明である。

- ②特異的損傷

図版15上面観に示すように、頭蓋冠の頭頂部（プレグマ部）から側頭部にかけて、頭骨表面に長さ約8cm、幅0.2~0.4cm、深さ0.1~0.05cmの擦過傷が認められる。恐らく鈍器による創傷と考えられるが、頭蓋冠表面にとどまっており、頭蓋骨の骨折らの異常を認めない。この創傷が果して生前のものか、死後のものかどうか区別することは困難であるが、創傷面が他の頭蓋骨表面の色調と異なり、かなり白っぽいので、むしろより後者の可能性が高い。

その他の残存骨に特異的な損傷を認めない。

4. C 地点の出土人骨（図版16）

1) 残存骨

C地点の人骨は松江警察署員によって取り上げられ、教委で保管されていたものである。

①頭蓋骨：前頭骨部（眉間、鼻前頭縫合部から右眼窩上縁部にかけての部位）

左右の錐体（内耳部）

下顎骨 2個

下顎骨(1)：左右の下顎枝欠損、残存歯牙は左下犬歯（3）、第1小臼歯（4）と右下第1臼歯（4）の3個である。

下顎骨(2)：左右の下顎枝欠損、残存歯牙は左下第1大臼歯（6）と右下犬歯（3）、第1小臼歯（4）は歯根のみ残存する。

②胸郭：肋骨片少數

③下肢骨：左脛部の近位部と右踵骨が残存する。

2) 性別

残存頭蓋骨片は性的特徴が弱いので不明である。

下顎骨(1)：残存下顎は全般的に小さく頤隆起、頤結節の発達が弱いこと、歯牙が小さいことから女性と推定する。

下顎骨(2)：残存下顎は幾分小さく、若年者が想定され、頤隆起、頤結節の発達は良く、男性の可能性が強い。

3) 年令

下顎骨(1)：残存歯牙の3、4、4の3個は歯冠部がほとんど磨耗していることから壮年～熟年者が推定される。

下顎骨(2)：残存歯牙の6の咬耗度は軽度で、その他の歯牙は死後欠で不明。歯牙の萌出は第2大臼歯までで、第3大臼歯の萌出していないことを考慮すると10代後半が推定される。

4) 身長・その他

残存歯牙と骨からは不明である。

5) 埋葬者数

1号穴内に散在する人骨は、

A地点：頭骨（+、1個）、下顎骨（-）、椎骨（+）、胸郭（+）、上肢骨（+）、

下肢骨 (+)

消失骨はかなり多数あるが、1体（女性、熟年者）が埋葬されたものと推定。

B地点：頭骨 (+、1個)、下顎骨 (+、1個)、椎骨 (+)、胸郭 (+)、上肢骨 (+)、下肢骨 (+)

やはり消失骨はかなり多数あるが1体（男性、壮年者）が埋葬されたものと推定。

C地点：頭骨片 (+)

下顎骨 (+、2個) 下顎骨(1)：女性、壮年～熟年者、下顎骨(2)：男性、青年

胸郭 (+)、下肢骨 (+)

C地点は残存骨が極めて少なく、頭骨片少數と下顎骨2個があることから恐らく2体が埋葬され、骨が次第に消失したものと考えられる。

しかし、A地点の残存人骨（女性、熟年者）の中に下顎骨ではなく、C地点の下顎骨(1)は女性で壮年～熟年者であることから、同一人由来も一応想定される。この場合は3体が埋葬されたことになるが、下顎骨のみがA地点からC地点に移動することは説明が困難である。

以上から、本横穴内には恐らく4体が埋葬された可能性が強いが、それ以上の埋葬者についても否定できない。

6. まとめ

1号穴内には人骨がきわめて不自然な配列で残存していた。

1) 埋葬者数は4名が推定される。

2) 埋葬者はA地点に1名、B地点に1名、C地点に2名が推定される。

A地点の埋葬者は女性、熟年者

B地点の埋葬者は男性、壮年者

C地点の埋葬者は女性、壮年～熟年者と男性、青年の2名が推定される。

3) B地点の男性の頭蓋冠表面に特異な損傷（擦過傷）が認められた。

2号穴出土人骨(図版16)

1. 2号穴出土人骨の概観

玄室の正面中央部最奥部やや左側の所に大腿骨片のみが少數散在する。

2. 残存骨

大腿骨片

3. 性別

残存大腿骨片からは不明

4. 年令

残存大腿骨片の厚味からして一応成人域と推定する。

5. 身長

不明

6. 埋葬者数

2号穴の内部構造からして、埋葬者は複数以上が推定されるが、残存骨が一箇所にわずかに大腿骨片のみであり、1名は確実であるが、それ以上は残存骨がないので、不明である。

7. まとめ

2号穴には大腿骨片のみが残存しており、一応成人骨と推定されるが、性別その他は不明である。

V. 周辺の遺跡

II. 位置と歴史的環境でも簡単に触れたが、御津地区では古墳時代をさかのばる遺跡の存在は知られておらず、地区的原子・古代の様相は殆んど明らかになっていないというの現状である。そこで、この機会に周辺の遺跡について若干の紹介をし、貝塚横穴群を理解する上で基礎的な資料を提示しておきたい。

秋葉山古墳群（鹿島町大字御津字観田）

御津の集落を東に見下ろす丘陵尾根上に造られている古墳群で、町遺跡台帳には、3基が登載されているが、現在は2・3号墳の2基が確認できるにすぎない。しかし、これらの占墳の周辺にもなだらかな尾根が続いており、さらに古墳のある可能性がある。現在確認できる2基は、いずれも箱式石棺を内部主体としており、隣接する講武平野とよく似た様相を示している。現状では、やはり箱式石棺を内部主体とする的松1号墳と並んで、御津地区では最も古い様相を示す古墳群である。^{往28}

秋葉山2号墳は、この尾根上に設けられた札所によって墳丘の殆どを失ない、箱式石棺が地表に露出している。墳形は後世の改変著しく、明らかでない。墳丘の標高は約50mである。

露出する石棺は、主軸を尾根方向のはば南北にとる。蓋石が1枚残存するため、正確な寸法は不明だが、内法長は約1.5m未満で、北端での内法幅は0.3mである。石棺は凝灰岩の板石を組み合わせたもので、長手の側板で、妻板をはさんでいる。長手板は各々2枚の板材を使っているものと考えられる。蓋は2枚であったと考えられ、1枚は割れて周辺に散在する。石棺内には土砂が堆積しているため、詳細については知ることができないが、現在観察できる石材には顕著な加工痕は認ることはできない。ただ、長辺西側では、板材を斜めに組み合わせている。

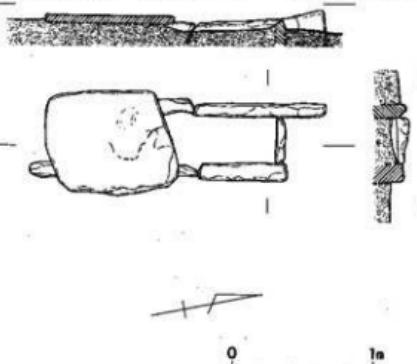


図26 秋葉山2号墳箱式石棺実測図(1/40)

秋葉山2号墳は、祠と土取りによって墳丘は大きく損われ、土取りの崖面に石棺妻側が露出している。墳形は後世の改変著しく、明らかでない。墳丘の標高は約60mである。露出する石棺は、主軸を尾根方向と直交のほぼ東西にとる。土取りによって、南側の側板1枚、東側の妻板1枚が転落している。蓋石裏面に石棺身部と組み合うように段が削り残してある。これによれば石棺内法長は約1.7m、東側で内法幅0.35mを測る。石棺は凝灰岩の切石を組み合わせたもので、長手の側板で妻板をはさんでいる。長手板は各々2枚の板石を使っているが、南側のものは1.5m以上の長いものを使用している。蓋には2枚の石材が架けられている。底面には親指指頭大から小豆大の礫が敷かれている。この礫床東端と、土取りによって崩落した土砂の中から臼玉7個が検出されている。このことから、この石棺は東に頭位をとるものと考えられる。

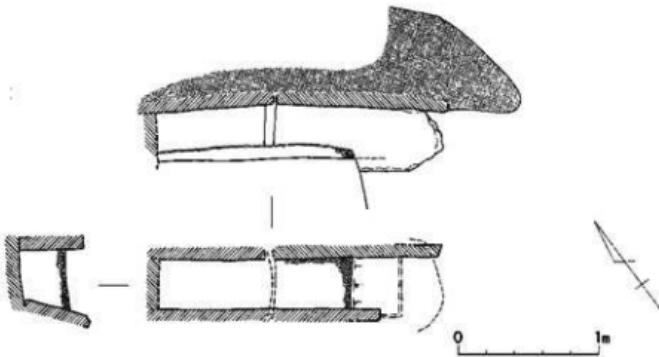


図27 秋葉山3号墳箱式石棺略測図(1/40)

出土した臼玉は、硬砂岩製と考えられる
もので、それぞれで若干の差はあるが
薄い緑色の地に白色のしまが入っている。
径5mm前後、厚さ2~3mmで丁寧に仕上
げられる。側面にかすかに稜をもってい
る。^{注24} 奥才18号墳出土のものに酷似して
^{注25} いる。

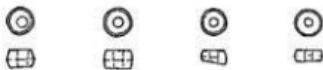
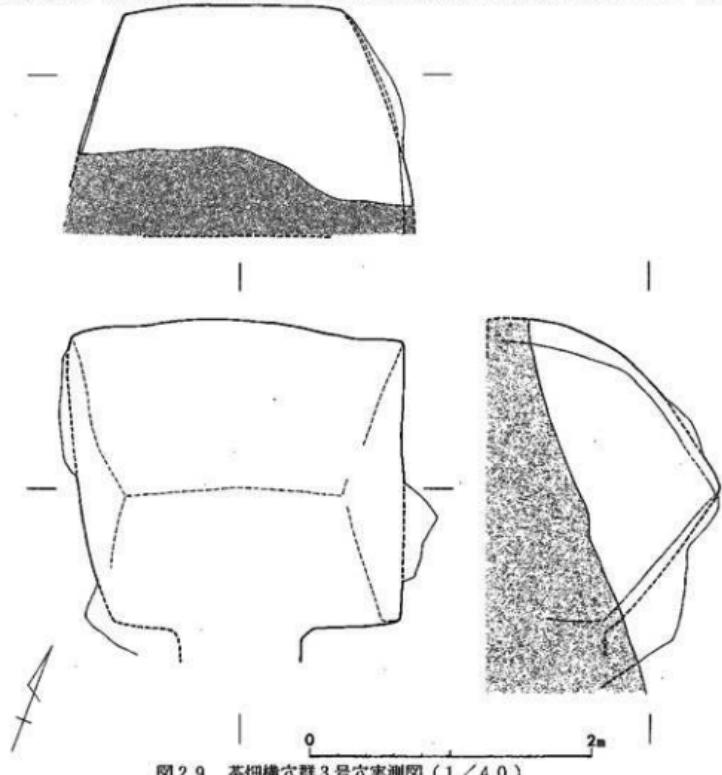


図28 秋葉山3号墳出土臼玉実測図(原寸)

茶畠横穴群（鹿島町大字御津字茶畠）

貝塚横穴群の西、丘陵南東斜面に掘り込まれている横穴群である。町遺跡台帳には4穴が登載されているが、現状では2・3号穴の2基が確認できるにすぎない。これら各穴は互いに離れて所在し、それぞれが支群となる可能性が強い。

茶畠3号穴は、貝塚横穴群と標高ほぼ等しく、同一の緑色凝灰岩岩脈中に穿たれている可能性が強い。内部は剥落が著しく、土砂が厚く堆積しており、かろうじて側壁・天井の一部が原形をとどめるにすぎない。入口部は崩落しており、羨道部の状態は全くわからぬ。玄室床面はほぼ正方形を呈し、三角形断面形平入形式に属する。玄室はS-21°-Eに開口する。規模・構造ともに貝塚横穴群の各穴と酷似する。出土遺物等は知られていない。



恵谷横穴群（鹿島町大字北講武字恵谷）

北講武から御津へ向かう峠道東方の谷奥に所在する横穴群で、丘陵南東斜面に掘りこまれており、計3穴が隣り合って存在する。この3穴はいずれも整正家形のもので、講武地域内では数少ないものの上、約1km離れた貝塚横穴群と同じ平入形式のものを含んでおり、注目される。

恵谷2号穴は、剥落かなり著しいが、四注式系整正家形平入のものである。玄室はS-39°-Eに開口する。界線は剥離のため明瞭ではないが、わずかに段のつく軒線や深く掘り込む棟の線が確認できる。玄室平面はほぼ正方形で、奥行約2.3m、幅約2.3mを測る。床面には土砂が堆積するため、排水溝等の施設の有無は確認することができない。各壁は内側にわずかに内傾して天井部に至っている。

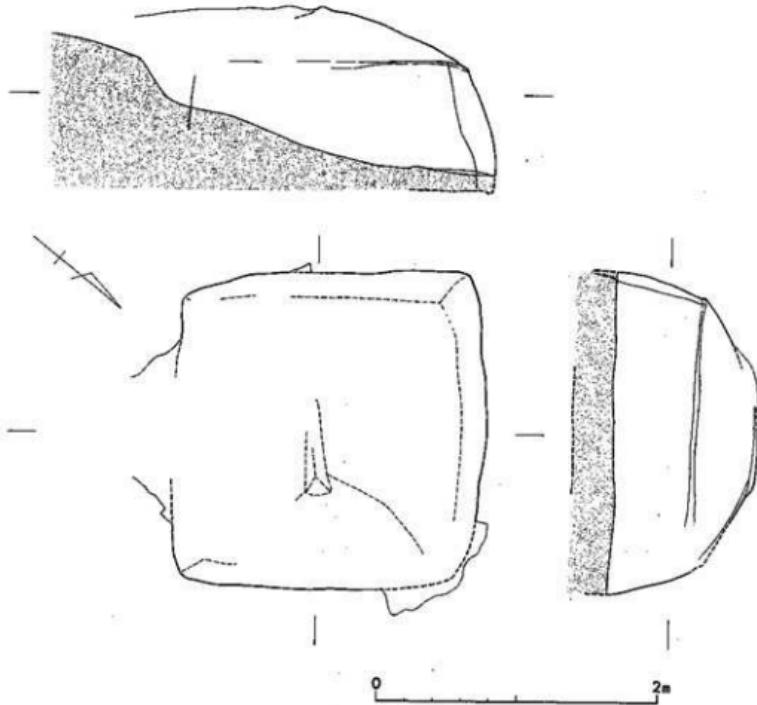


図30 恵谷横穴群2号穴実測図(1/40)

恵谷3号穴は、比較的保存状態良く、四注式系整正家形妻入のものである。玄室はS-46°-Eに開口する。玄室床面は、ほぼ正方形で、奥行約2.1m、幅約2.4m、高さ約1.3mを測る。界線は段を掘りこむ軒線および柱線が明瞭に残るが、棟の線は剥離しており、認めることができない。各壁はわずかに内傾して天井部に至っている。

床面は奥壁近くで観察でき、ここでは玄室四壁をめぐるものと、玄室中央を貫く排水溝がある。この排水溝は、貝塚横穴群で認められたものと軌を一にしており、注目される。奥壁には幅約8cmの工具の痕跡が残っている。また、西隅にも玄室隅を丸くするように短く工具痕が連続している。

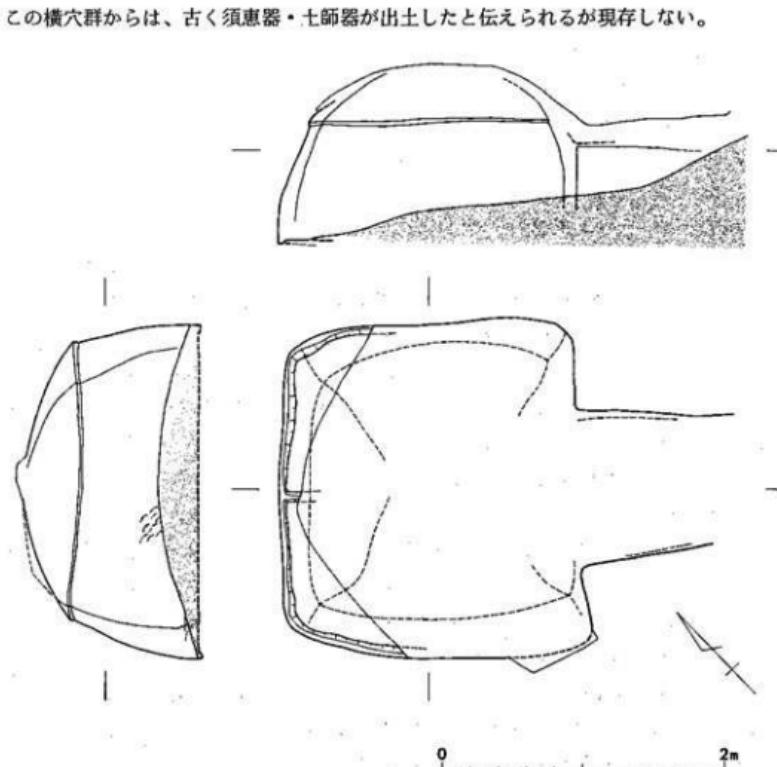


図31 恵谷横穴群3号穴実測図(1/40)

VI. 小 結

貝塚横穴群の所在する御津地区は前章で触れたように、古墳時代を溯る遺跡は現在まで知られていないが、古墳時代に入つては、秋葉山古墳群、的松古墳群など箱式石棺を内部主体とする古墳群が出現している。これらの古墳群は、講武平野の様相と比較するならば、古墳時代前期まで溯る可能性がある。広い沖積地を有して農業生産力の高かった講武平野と内部主体に関しては、同様な古墳に葬られる首長をこの地区でも析出していたことが判明した。古墳時代後期には横穴群が出現する他は詳細は不明である。

貝塚横穴群は、9基以上からなり、かなり大規模な横穴群といえる。さらに斜面続きに隣接して茶畠横穴群が所在するが、これらも含めて同一の横穴群として把えることが可能である。この茶畠横穴群も複数の支群に分けることができ、この丘陵は横穴の群集地帯と考えられる。この丘陵には幅約5mで帯状の緑色凝灰岩の岩脈が走っており、横穴群はこの層をえらんで掘り込まれている。この岩脈の存在も群集の一因になっていると考えられる。

調査を行なった第I支群は各穴で墓壁を共有する上、支群内の各穴は相似た構造を示し支群としての強いまとまりを見せている。4穴はいずれも床面ほぼ正方形に近く、三角形断面平入形式に属するものであり、若干規模の大小はあるが、ほぼ同様な規格によって造られたものと考えられる。ただし、4穴とも上記の形式に属するものの、いわゆるテント形ではなく、前壁・奥壁とも床面から垂直に近く立ちあがっており、軒線こそないものの、整正家形に近い構造となっている。^{註18}これまで本町域内では丸天井形および三角形断面妻入の形式のものが主流を占めると考えられていたが、その中で平入形横穴の濃密な分布地区があることが判明した。このことによって、町域内の形式別横穴分布はかなり異なった様相を帯びることとなった。

この横穴群は、さらに注目すべき点を認めることができる。それは、玄室床面・羨道・前庭にかけて排水溝を設ける点、全てで残存していたわけではないが、羨門部に石材を使用して門状の施設を設けている点、羨道内に石材を積んでの閉塞を行なっている点である。原則的にこれらの特徴をもちながら、若干の例外的な施設も指摘することができる。それは、1号穴での河原石を木板等の台石とした埋葬方法、2号穴での板石を使用した箱式棺様の施設である。これらは同形式の横穴でありながら、埋葬にあたっては、わずかずつではあるが、各穴での個性を表現したものと評価できる。

横穴の構築時期は、1号穴で山陰の須恵器編年IV期の須恵器の出土を見ており、古墳時

代後期後半に該当し、7世紀前半に位置付けられる。同一の形式に属する他の横穴も、概ね1号穴に前後して造営されたものと考えられる。しかし、2号穴では、底部に糸切り痕を有する須恵器杯、肆の出土を見ており、奈良時代に至っての追葬、あるいは玄室内への供獻を考えることができる。

この遺物の示す時期には『出雲國風土記』が勘造されている。これによれば、「御津浜」と呼ばれるこの地区は、「百姓の家あり」とされ、島根郡の条を著述した官人層に「百姓」として描かれた民衆が、横穴群と密接な関係を有していたことが想定できる。2号穴内の遺物を追葬に伴うものとすると、風土記にいう「百姓」が横穴に追葬を続けていることになり、遺物を埋葬終了後に供獻されたものとしても、「百姓」と呼ばれた民衆と横穴群の造営主体との深いかかわりを否定することはできない。いずれにしても、奈良時代にはいわゆる公民として把握されていた層が、前代には横穴群の造営主体であったと考えられ、横穴被葬者を具体的に考えてゆく上で注目できる。

次いで、横穴被葬者の集落内での地位であるが、今回の調査では具体的に判断できる材料はなかったが、漁撈に従事し、海にむかってくだる狭隘な斜面を耕作もするといった集団の指導者層およびその家族員と今の時点では考えておくこととする。

また、墓壁を共有し、同一の規格にそって作られている支群のまとまりが何を物語るものかは現時点では明らかにすることはできないが、当時の集落や家族構成の実態を何らかの形で反映していることはほぼ間違いないであろう。こういった視点からの調査・研究にもまつところが大きいことを確認して、本横穴群調査の小結とする。

注 1. 『鹿島の遺跡小集』 鹿島町教育委員会 1979

2. 注 1 と同じ

3. 注 1 と同じ

4. 加藤義成『校注出雲國風土記』 1965

5. 注 1 と同じ

6. 注 1 と同じ

7. 『菅田考古』 16 島根大学考古学研究会 1983

8. 注 1 と同じ

9. 『菅田考古』 15 島根大学考古学研究会 1979
10. 山本清「山陰地方村落古墳の様相」(『島大論集』9 1959)
11. 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」(『古文化談叢』第7集 1980)
12. 注7と同じ
13. 注11書による。しかし、床面が正方形で、前壁、奥壁とも垂直に近く立ちあがったのちに屈曲するなど、むしろ整正家形平入形式のものの影響を受けている可能性があるが、指摘するにとどめ、今後の類例をまちたい。
14. 類似の閉塞施設は、町域内では1979年に町教委が調査をおこなった寺尾横穴群で検出されている。その他、原位置にあるものか判然としないが、寺の奥横穴群清水第1号穴でも、漢道内に石材が認められている。前者は注1書、後者は注9書。
15. 類似の施設は、簸川郡簸川町御的山横穴群で検出されている。勝部昭ほか『御的山横穴発掘調査報告書』簸川町教育委員会 1982
16. この名称については、永見英氏の仮称に従う。永見英『黒鳥2号横穴発掘調査報告書』安来市教育委員会 1983
17. 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971)
18. 「出雲国序跡発掘調査概報」松江市教育委員会 1970
19. 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古』3 1980)
20. 横穴内に箱式棺を組む例は、大原郡加茂町平田横穴群1号穴、鳥取県米子市陰田横穴群11号穴で認められている。前者は、門脇俊彦「加茂・平田横穴群」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』第V集 1974)、後者は、「陰田遺跡群」Ⅲ 米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団 1983)による。しかし、これらはいずれも三角形断面形妻入り形式のもので、本例とは異質である。
21. 注17・18による。
22. 注16と同じ
23. 注1と同じ
24. 松江北高校三島欣二先生のご教示による。
25. 奥才古墳群は、1981~83年鹿島町教委調査。
26. 注4と同じ

図 版

図版 1



御津貝塚横穴群遠景

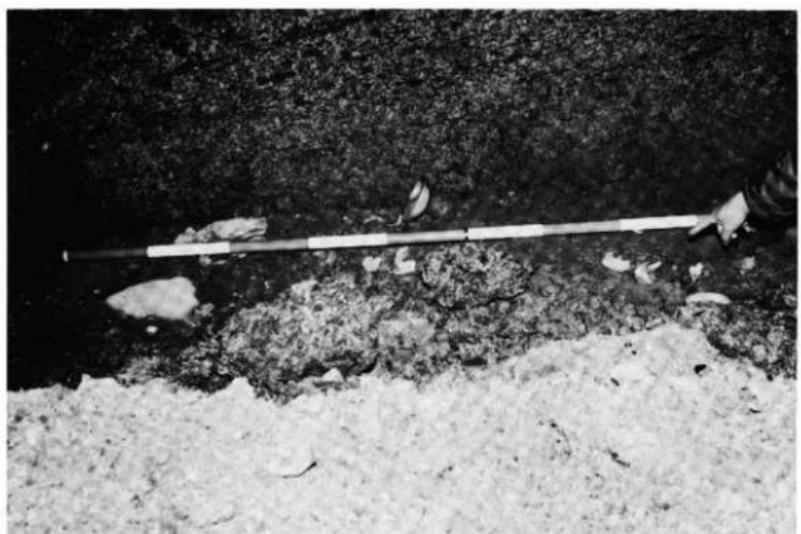


御津貝塚横穴群近景

図版 2



I号穴正面



I号穴開口時の玄室の状況(松江警察署提供)

図版 3



I号穴玄室内



I号穴内人骨出土状況
(B地点)

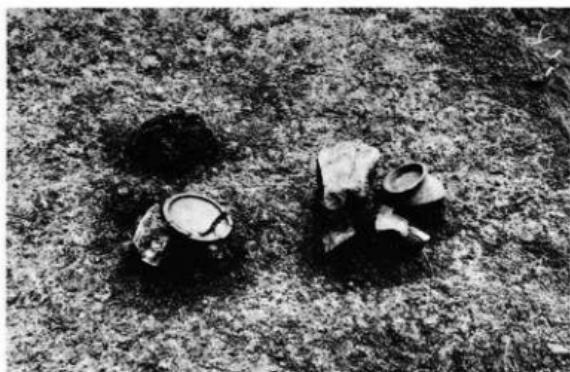
図版 4



1号穴前庭横断面

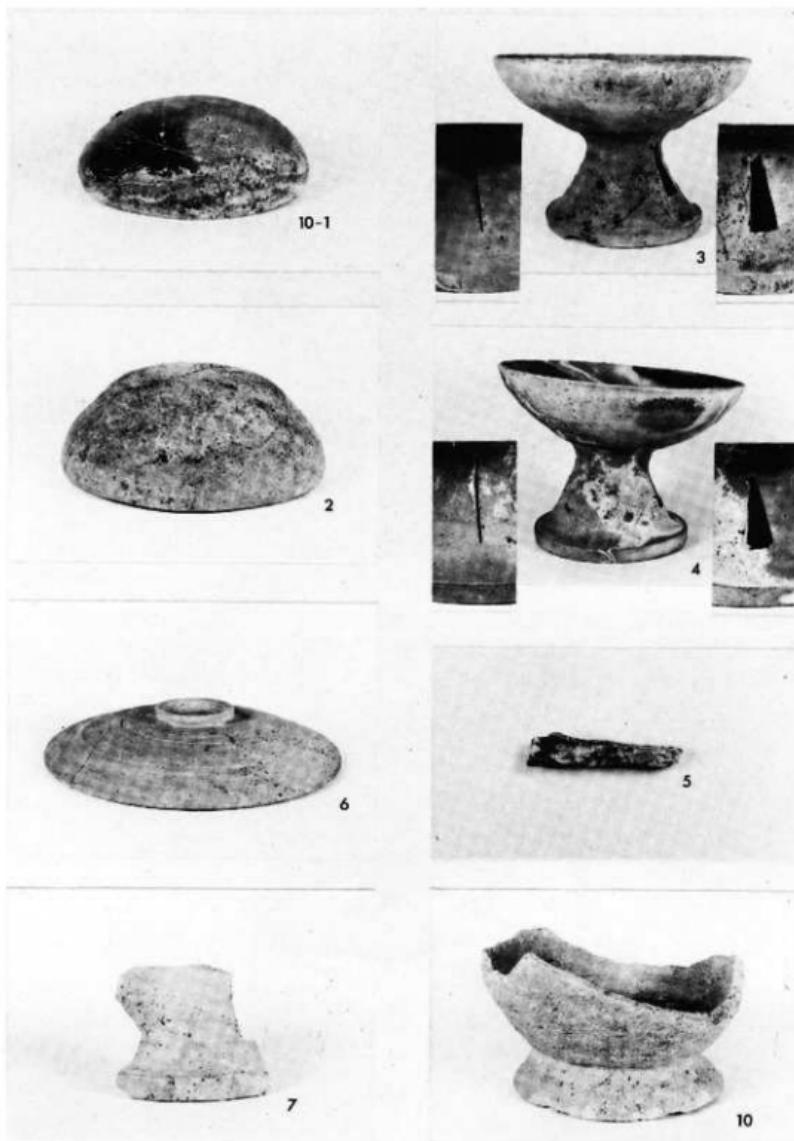


1号穴羨道閉塞石堵塞



1号穴前庭部遺物出土状況

図版 5



I号穴出土遺物

図版 6



2号穴正面



2号穴閉塞状況



2号穴玄室内石材散乱状况



2号穴側壁



2号穴石棺材

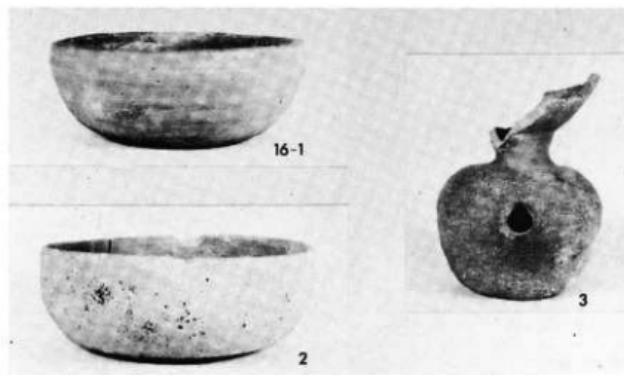
図版 8



2号穴内土器出土状況(1)



2号穴内土器出土状況(2)



2号穴出土遺物



3号穴正面



3号穴羨門部土層

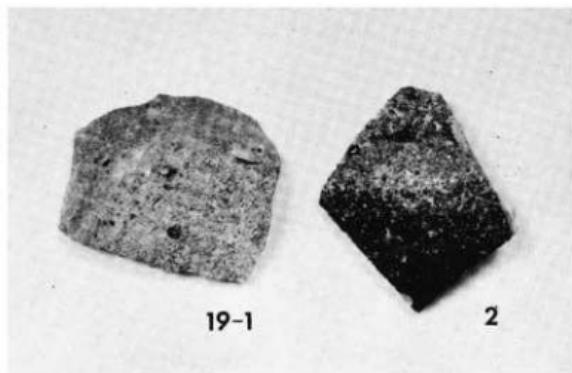
図版 10



3号穴玄室内



3号穴羨道



3号穴出土遺物

図版 11



4号穴正面



4号穴閉塞石

図版 12



4号穴羨門部土層

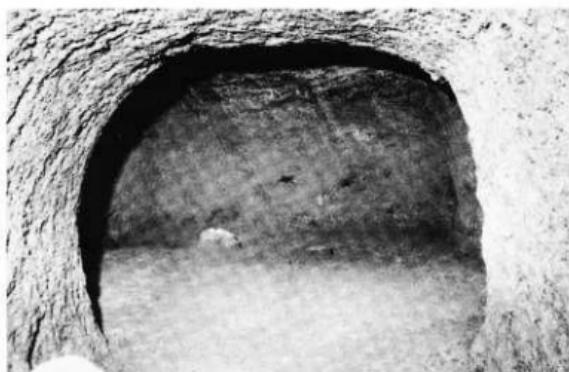


4号穴羨門部石材

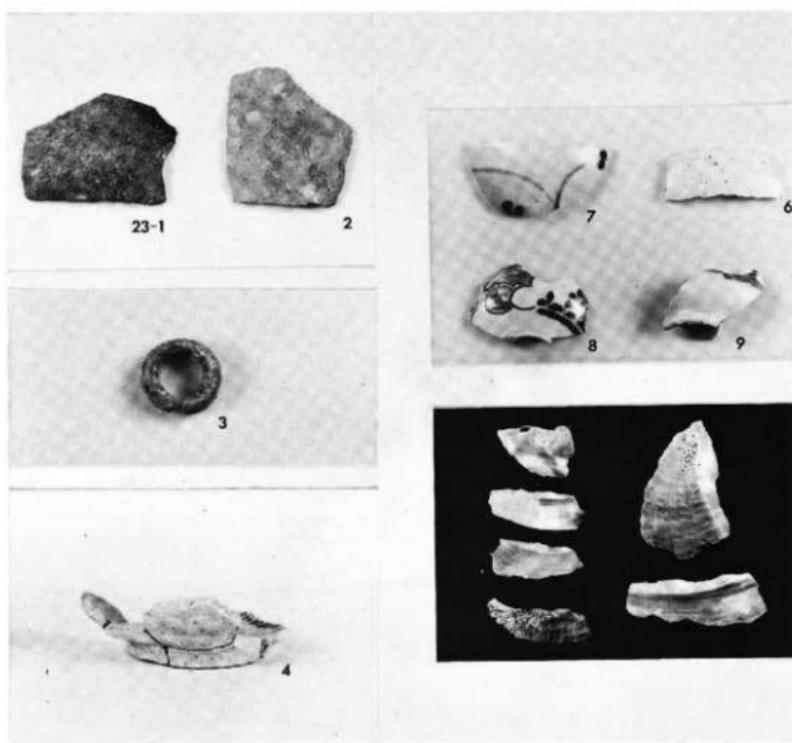


4号穴羨門部立石

図版 13



4号穴玄室内

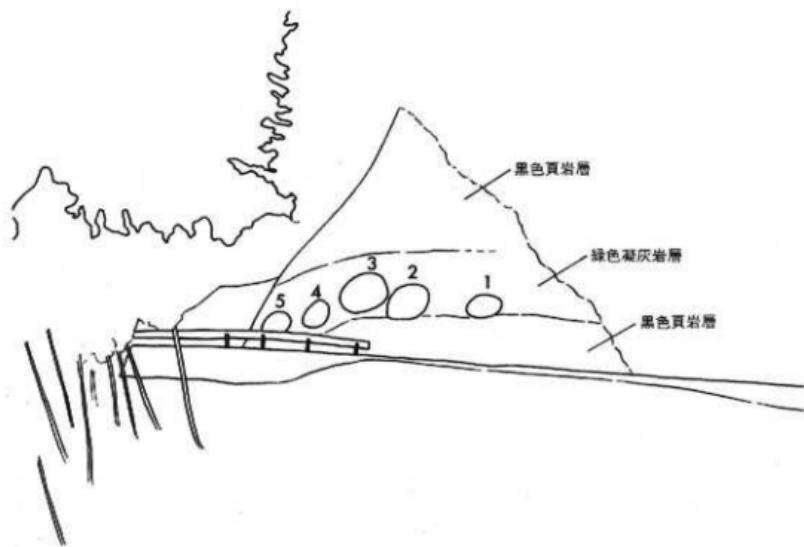


4号穴出土遺物

図版 14



第II支群全景



図版 15



I号穴出土人骨(B地点)

図版 16



1号穴 A 地点	1号穴 C 地点
頭蓋骨	頭蓋骨
1号穴 C 地点	
下顎骨(1)、(2)	
2号穴	
下肢骨	

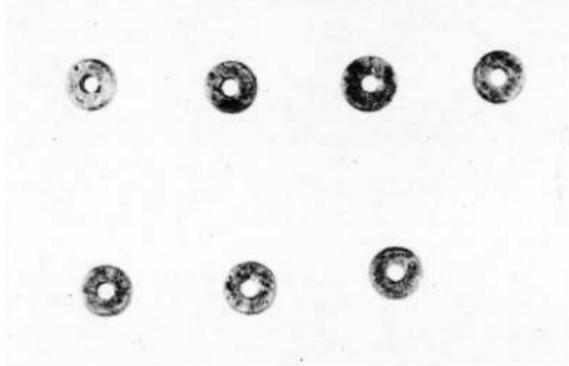
1・2号穴出土人骨



御津秋葉山 2号墳箱式石棺



秋葉山 3号墳箱式石棺



秋葉山 3号墳出土白玉

県営林道澄水山線開設事業に伴う
御津貝塚横穴群発掘調査報告書 I

1984年5月

発行 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 有限会社 松陽印刷